

資料編

Ⅲ 聞き取り調査

記号	名前	聞き取り日時	2020年6月22日
A	内木哲朗	聞き取り場所	内木家住宅
	所属・役職	山守内木家 20代目現当主	

・直根論と山守

先日の山寺先生とメールでやりとりしてたんですけど80過ぎてなかなかこっちへ来れないって。でも地元の方でそういう里山づくりをやっているんですね。

長野県の澤底地区、そこで災害に強い山を育成して、根っこをしっかりと持った植物を植えたりしながら見た目にも綺麗というか自然に、視覚的にもいい山を作って四季折々色々な花が咲くとか実が取れるとかそういうような。

自分がちょうどこないだ先生に送らせてもらった本の中で、太田先生のお弟子さんの芳賀くん、あの子のやった研究で、当時の山守がどんぐりを集めたり生活に密着した植物を育てていくための準備を色々していくんですけど、森に多様性を持たせるという。

当時はそういう考えでやっていたかはわからないけど、結果的にクリやマツやスギやヒノキやいろんな物が混植しているような山を作っていくとか里山はそういった生活に密着した物を作るような山づくり、奥山はヒノキを中心にした山を作っていくというような、当時の人も色々考えてやっている。

その作り方、どんぐりから育てるということが実は大事なことでそれは山寺先生の直根論と関係してくる。

なかなか今どんぐりから育てられないのである程度、根を作るとポットみたいなもので苗を作っていくっていうので、ちょっと長めの根がつく、育つような形にしてそれを山へ持って行って植えるようなそういう技術を今、実践をして見えるんですよ。

一回行って見ないといけないと思ってるんですけど先生とこね、2年3年ぐらい会ってない。メールではやり取りしてたけど。ちょうど三年ぐらい前に行った時は、病気を、結構大病をして見えた。それがある程度戻ったけど歳とったんでということであまりあちこちへは行けないというような状況ですね。

・拡大造林期の歴史

歴史的な背景からちょっと考えていくと1600年から1700年代までの100年間で木曾も裏木曾も森林、木を失ってしまった時期があるんですね。それを再生する1700年ぐらいから再生していくんですけどその貯金を戦前戦後までずっと使い続けてきたんですね。

その日本ではね、地方の木を消費していったんですけど、それと同時にかぶるような形で切った跡地に拡大造林、広葉樹も含めて植林を戦後進めていくんですけど、チェーンソーが登場した昭和30年代からのスタートと言っていいと思いますね。

その前に植えたものがどういう形で植えられたかはちょっと分からないんですけど昭和30年代からスタートしたいわゆる現代林業と言ったらいいんですかね、現代林業の植えて育てて切っていくスタイルに始まっているんですけど、植えてっていうのはもちろんいいですけど植え方に問題があったということになりますね。

根っこの話、地上部はいいんですが、地下部についての研究ってのがなかなかされてなかったんで、山寺先生はその地下部の直根に非常に着目していますので、それは災害という面での考え方なんですね。

直根の無い植林をずっと、戦後続けてきたために今いろんな災害が起きているという現実がまずあって、もう一つは先ほど先生が言われた直根があるかないかによって文化財の木が文

化財の木が育つかとかがって話になってくるんですよ。人工林の戦後 30 年代から植えた木っていうのは木曽ヒノキにはなれないんですね。なれないですねっていうのは仮定なんですけど、今日本中に植っている戦後植えた木はヒノキなんだけど木曽ヒノキではないんですよ。木曽ヒノキにはなれないんです。

成長量が非常にいいですからそれは非常に理にかなってるので早い期間でそんだけの蓄積を増やしていくという考え方の中ではそれはそれで社会に貢献できるので住宅とか一般のものには十分使えるし耐久性もあるしいいんですけど。

ただ京都や奈良なんかにある文化財を修復したり、もしくは再建をしたりということになった場合にはやはり材質的には木目の問題があったり、耐久性の問題、色々考えると難しいっていうんですかね。

当然その昔作られた建物っていうのは天然木で作られているということなので天然木が腐って修繕をしようという時にあるいは天然木で修繕をしなきゃいけないだろうって継手継手でもね、成長の大きい年輪のものを成長の細い木目のものに嵌め込んでってことにはいかないのでその辺はこだわれば。

まあ、それはやはり 300 年 400 年かけて育てて。なんて表現したらいいんですかね。先生は表現できるかもしれませんが、そのそういうこだわりみたいなものがね、何か他のものを生み出すってこともあると思うんですね。

例えば今のこの木工品もそうなんですけど、昭和 60 年ぐらいに木曽ヒノキってものが不足して値が倍になってくんですね。

原木の値段が倍になった、一気に倍になったんですよ。民間材との差が、っていうかまた別のものとして扱われるようなことになってですね。まあ、木工屋さんがどんどん廃業に追い込まれた時期もあったんです。この辺でいうと楚南っていう会社があったんですけど、そんなところも倒産しちゃって、材料の調達面で、原料が高くなってしまってバランスが崩れちゃった。

当時の木工所はそのまま 4:3:3 とか 3:3:3 とかそういった形で作っていたんです。それは例えば 1000 円のものだとすると 400 円の中で材料を買って加工して作る、30%、300 円が問屋や仲介業者の取り分、あとの 30% は小売店というような、だいたいそれくらいのバランスで商売をやっていたんですけど、その 40% の製造ラインの部分が完全に立ち行かなくなってしまってダメになっちゃったということですね。

そこの問題はやっぱり、桁の問題も出てくるんですよ。桁っていうのは、桁目、板目というのがあるんですけど、板目は丸太の、60 年の木だとだいたい芯から柱をとって、その横で板をとって、残った半月状の木皮(こわ)のこの部分で刷毛の柄の部分を作ったり、さらにその残った部分で箸を作っていたんです。この辺では全部そういった職業によって、全部、クジラと一緒に全部消費できるような形にしていたんですけど、当時は 30 年くらいだったけど、これから 60 年になると桁目の部分がたくさん取れるようになってくるっていうことが起こってくる。もちろん目は悪いですよ、目は成長して大きい。民材は荒いけど、官材は細かいんです。

・「木曽ヒノキ」とそれ以外の「ヒノキ」

官材っていうのはいわゆる天然のヒノキのことなんです。「官」っていうのは「官公庁」の「官」で国有林の木っていうことですね。で、「木曽ヒノキ」っていう言い方は非常に、いろんな場所によって違って、こちらの裏木曽の方では「木曽ヒノキ」は「官材」を指すんですよ。で、今度は 19 号線沿いの木曽川沿いの方では「木曽ヒノキ」は民材のことも木曽ヒノ

キと言う。木曾で育った ヒノキと言うふうに、ということで言いますけど、まあ、実際にはその2種類しかないんで、要は300年400年かかって育った木と、それからわずか60年で育ったヒノキという分け方です。で、60年のヒノキっていうのは戦後の30年代で植えたのがほとんどですね、30年代40年代で植えられているんですけど、ほぼ、日本のヒノキというか人工林の8割はその時代に植えられています。

・生産意欲、関心の低下

今、植林はほとんど全国どこ行ってもですね、ほとんど行われていないっていうか、ごくわずかだけ、植えられているだけですね。最近ちょっと皆伐ってみんな全部大面積を伐ってしまう皆伐っていうのが認められてきたのでそうすると植林もこれから増えてくると思うんですけど、それもちょっと前までは本当に日本では行われてないっていうね、もうほぼ、過剰生産状態になっていると言っていいほど、意欲がない、まず林家に、森林所有者に、その、これくらい森を育てようっていう気持ちがないっていうのと、育ててももう、全然利益がない、ということになっています。まあ、その植えた人たちがほとんど死に始めているので、当時の苦しい、そのなんですかね、天然木を伐って林地を作って成長してそこに植林していくっていう仕事を体験してきた人って少なくなってきたね。その次の世代になってきたので余計その木のありがたみってのも分からないし、値段は60年の1本の木が1000円くらいにしかない。1000円いかないんですよ。まあ、とんでもない値段なので、伐っても仕方ないっていう考え方と、まあ、国は昔の稲作と一緒にそこに補助金を出して伐って、間伐を促進しているんですけど、実際間伐をして出しても懐には一銭も入らないっていう、林業所有者には、そういう状況です。まあ、これから森林環境税が投入されていくと思うんですけど、どういう風な形でそれが効果が出てくるかっていうのにかかっていると思いますね。今度が本当に正念場だと思います。森林の使い方に対しての。で、この今度の時にまた見誤ると同じことの繰り返しになるだろうし、逆に1700年代に尾張藩がやってきた、その森林の再生のような行動を起こさないと、また同じ繰り返しになるんですね。また植えて育てばいいわという考え方だけでやるとダメなので、まあある意味1700年代というか江戸、尾張藩の林業政策っていうのが、あの、学ぶというか先人に学ぶというのが非常に大事な時期に来ているのかなと思いますね。森林環境税は各地域、もちろん名古屋にも配られていると思うんですけど、多分ね、使い方が分からないというか、中津川市でもそうなんですよ、今、これといった案が無いのでとりあえず、基金として積んでおこうという、その程度なんです。だから本当に欲しい、欲しいっていう時期を逸しているので森林環境税っていうのは20年30年も前に、その案が出たんですね、案が出てはぼしゃってというようなそういう時期を経ながら来てるんですけど、まあ今回はある意味その、上手い使い方をするとか将来の日本の森林というのが、左右するとかね、大きなものになってくると思いますね。それでももちろん、建築にも響いてくるので、建築のその様式とかね、それこそ建築技術自体は太田さんも言っていましたけど、退化しているっていうか、昔の人の技術の方が優れてて、それを真似するなり継承はしているけど、それを、継承することもなかなか難しい状況に陥っているというような状況なので、それを材料の面から考えていく上でも、天然のヒノキとか天然のスギとかそういった素材を生産する山づくりっていうのが大事なポイントになってくるということですよ。

・自身の発信力について

1つ、僕自身に発信力がないのもあって、ていうのはその経験値が低いっていうのがあるんですね。東京生まれの東京育ちで、30、40年くらい前に帰ってきているんですけど、林業を果たしてやっているのかというところがそうじゃなくてですね。ある意味その古文書から出てくる情報を伝えるっていう仕事っていうか役目を果たしているに過ぎないので、実際に専門的な見解をやるにはいろんな各分野の先生方のお話とかですね、実証した部分を出すんですけど、あまりにも戦後取り組まれた林業政策っていうのが浸透し過ぎていて、完全に分岐点が違うんですよ。分岐点が離れてこちらに全ての国民を含めて林家の頭がそちらの方へ行ってしまっているんですね。それをこちらへシフトしてくるっていうのはなかなか難しいんです。で歴史はどうだったのかという長い間こっちの自然に育てていくっていうか、自然の中に人間が力を少しずつ入れたたり、手を入れながら育てていくっていう、森林育成を続けてきたわけですね、営営と。歴史でいうとまだ100年も経っていないんですよ、日本の林業の歴史っていうのは、ある意味では。

まあ確かに、明治になってからドイツから林学を取り入れて始めるんですけど、実際にそれが実践されていく、理論上実践されていくっていうのは戦後、チェーンソーが登場してからなので、それはそれで悪い、いいじゃないけどね。当然日本の住宅事情やら人口増に対応してくるためには早くとにかく作らないといけないという状況にはあったので。

まあ育つ前に鉄骨が入ってきたりいろいろして…

・災害への対策

その辺のいろんなズレや誤解があったりとか思い込みとか、そういったものが現在の山の姿になってしまっているというのもあるんですけど、それを誰も否定できないし、別に否定する必要もないと思うんですけど、ただ現実には木が植ってて、木が育っているっていうのは間違いないわけですね。で現在は根っこ無い木なので、災害が起こりやすくなっていて、もうこれから多分全国でどんどん災害は起こると思いますし、緑のダムっていう理論は成立しないということですね。逆に緑が災害を誘発するのでダムをいくら作ったって、そこに流れてくる立木の処理とか、それにおける人災ですね、が各地で起こるので、逆にいうと、木を全部なるべく早く伐ってしまって、まあ間伐でもいいんですけど、伐って、広葉樹なり、いろんな、直根のある植物をどんどん育てた方が災害は起きないし、災害に対する補填の費用っていったらば、ものすごい、森林環境税の額なんかじゃないんですよ。堰堤造ったり、ダム造ったり、河川の整備したりっていうのは。っていう話を考えるとそんな額じゃないので、まあウイルスの後は今度は山の災害だと思えるんですよ。心配しなきゃいけないのは。本格的な。そういうところへ、なるべく早く着眼して、対策してやっていくっていう、やっぱり1番強いのは災害、防災っていうのが1番分かりやすいのかなっていう。

防災を考えて、直根のある木を育てれば、逆にいうと建築文化も守れるということなんです。直根のあるものを育てて木曾ヒノキを育てていくっていう、まあそれは300年、400年先の話なんですけど、そういう話になってくるというね。

問題は山寺先生も高齢で80越してですね、そろそろ危ない状況に来ているので。

山寺先生の方はある意味、その中心的な主軸側からというか、アウトローというか、というところもある、干される部分もあったんじゃないかという、理論が。緑化工という理論ではもちろん大成されていますけど、森林という、森林保全という考え方の方では、やっぱり鼻つままれちゃうっていう、いったら干されちゃうようなところがあったかと思えますね。

・本来の林業の姿

例えば木曾ヒノキと東濃ヒノキの違いとか、人工と天然木の違いということすらもなかなか理解されないんですね。そういった難しさというのがやっぱりあって、木とか山とかから離れた、あまりにも離れて解離が起こっているのが難しいですよ。どうやって説明するか。今の子ども達の森林教室なんかでも、何やっているかというのと、相変わらず、間伐体験とか下草刈り体験とかやっているわけですね。下草刈り体験とか最初にやらせると、林業なんかやりたくななくなっちゃうのは当たり前なんですよ。それをあえてやらせている。それを全国でやってるんですよ。嘘を教えちゃいけないんだけど、指導する側も結局、こちら側がやってしまっているというのがあるので、歴史的な部分からも考えていく、背景も考えながら、昔、本当の林業はこれなんだと。あくせくと働かせて辛い林業ってないんですよ。林業って楽しいし、のんびりした仕事なんだというような部分を伝えたいのもあるんですね。古文書の中で、太田先生も言っているし、もうちょっと言えば、こんな生活できればいいなというのが、「緩々した生活」ってよく古文書に出てくるんですよ。

デンマーク語でヒュッゲ (hygge) というのがですね、今本屋さんに行くといっぱい並んでいきますけど、あれにヒュッゲだと日本語に訳す言葉がないと言われていきますけど、実はその「緩々」が多分そうじゃないかなと。彦七の自分が書いている中で緩々と今日は過ごしたという、人が来て豊かな時間を持ちながら生活をしていくという、そういう部分を持って描いたんですけど、そういった文言も1つの切り口だと思うんですね。

・大径材が収入になり得る

本来なら200年300年400年という先祖が植えたというか育てたものを引き継いでいけば、大体1本、その年輪が1本の年輪、節が1本ですね。その1本が大体1万円になるんですよ。1万円に匹敵するんです。で300年なら300万円、200年なら200万円という相場が出て弾かれるというんですけど、まあ200年だとちょっと年齢がないので大体300年400年ということになるんですけど、300年400年というのはなんで起こるかという、1700年に枯渇した木が成長して300年400年という年数を重ねていくんですね。まあ、100年合わないじゃないかというのは、1600年に芽吹いて育った木が、これくらいにしか成長しないので、それがまだ当時は山に残っていたんですね。それは伐る必要がないじゃないですか、伐る価値がないので、それは残されてて、それもプラスして大体300年から400年くらいという山が出来上がっていくということなんですよ。で戦後、大量に、明治から戦後にかけて昭和40年くらいまでの間にどんどん伐り出された木っていうのは、その頃に再生されたということなんです。1700年から育て始めた木なんです。その貯金を使い切ってしまったということなんです。でもただその木を、その1700年から戦後までに全部伐られたかっていうと、実は伐られずに済んだ山が現存しているんですよ。それが木曾ヒノキ備林っていう加子母の中にあるわずか700haの山なんです。その山を見ると1700年に伐り尽くされた山が再生してそこに育った山の姿を見ることができるところでは、大きなバックヤードになってくるといえることですね。

それが出之小路山で、今伊勢神宮の式年遷宮の御神木の故郷になっているということですね。それがなかったら伊勢神宮の御神木の儀式っていうのは成立しないということですね。木曾にも赤沢備林っていうのがあるんですけど、赤沢備林よりもいい木があるというか、木曾も同じ歴史を辿ったと思うんですけど、なかなか木曾はうまくいかなかったっていうのがあるんです。だからそういった1700年くらいから森林を再生した歴史も大きな1つの部分ですし、もしそれがずっと続けられて、個人でその山を所有しているとすればですね、例えば1

本が300万とか400万とすれば、大体3本伐ればかなりの所得の生活が保てるじゃないですか。そうすると例えばここにいて、今年は3本伐ろうって出して自分で出したとしても、ヘリコプターで出しても十分もと採れるんですけど、そうって生活をすればですね、遊んで暮らせるわけですよ。晴耕雨読の生活とか可能になる。それが本当の林業なんですよ。じゃあ、戦後植えたヒノキの値段はどうなのかというと1本1000円なんですよ。1㎡で換算すると、今人工林は大体18000円です。ヒノキで、スギだと8000円くらいの値段で取引されているわけですね。それが天然のヒノキだと60万なんです、最低で。例えば500年生600年生700年生になると、もうほとんど値段がつかないくらいになってしまうというわけですね。だから価格が植林の30倍ってというのは本当なんです。

ただその30倍なんですけど、もう材料がないんですよ、現実問題。その700haの出之小路山においても年間150㎡しか出さないということにしているんですね。だから全体の蓄積が上がってくるんですけど、その中で上がった分を伐っちゃダメなのでそれ以内で抑えて、さらに森林が蓄積が増えていくように育つためには150㎡しかその山から切り出しちゃいけないよっていう考え方なんです。これもちょっとおかしいんですけどね、実際。じゃあサワラをどんどん増やしちゃって良いのかって、ヒノキに似ているサワラっていう木があるんですけど、それは繁殖力が大きいので、じゃあヒノキを150㎡伐っちゃったらサワラがどんどん増えちゃうよと、席卷されちゃうということもあるので、昔の人はバランスをよく考えてサワラを間引きしてヒノキを育てるっていうことをやってたんですけど、そういった技術は今、森林管理所には無いので、人事異動でどんどん3年くらいで替わってっちゃう中ではとても山を長期に見て考えるっていう方法はとれないってことですね。その辺も、人材の部分でも考えを改めないといけないんですよ。

・文書の中の山守の施業

文書の中で出てくるものを抽出するしかなくなってくるんですけど、300年前の話ってというのは記録がないので、難しい部分もあるんですけど、ただ当時山の「66年手法」っていう方法が残っているんですけど、それは全山の蓄積を測り終えて、今の出之小路でやってる仕事と一緒になんですよ。全部の樹種と蓄積を測って、何年サイクルで更新をすれば良いかというのを編み出していくって技術なんです。それを応用というか、取り入れればできるということなんですよ。最初50年サイクルで組んだら結局ダメで66年にサイクル延ばしたんですけど、それなりの根拠がそこにあるんですよ。それと木を伐った後に山引き苗って、山引き苗ってというのはそこら中に生えてる自然の苗を根ごととって、束ねて持ってて、木を伐った後にその周辺に2、3本植えていくんですけど、そういった技術、技術までいらないかも知れんけど、そういう育て方ですね、そういうのも1つの重要なものなので。

・山引き苗の成長速度

鐵臣さんもそうなんですよ。自分の山に山引き苗を持って一山植えて見えるんですけど、あんな病気になっちゃったので。麓の山を見せてもらってこれくらい成長違うよってことは立証されているんですね。早く太らせるっていう考え方がある中では、効率性を考えると逆行しちゃうのでどうかなと。自分の生きてる中で間伐をしてお金に換えて最終的には孫くらいで育ちきったっていか70年80年になった木を伐るってのが根強く考え方の中にあるもんですから。

・主張することの難しさ

根本的にもヒノキが植える苗が違うというところが大きいですよ。もう植えちゃっているというのが大きい。それが災害を生むということもあんまり言えないところもあると思うんですね。例えば林野政策の中で戦後植えた、盛んに補助金をやって植林を奨励してた関係上、その当時の植え方が間違っていたとはなかなか言えないと思うんですね、政府としては。僕は言ってますけど、でも公にはやっぱり、行政にいましたので、全部否定するっていうのもなかなか難しかったですけど、まあ今はもう言えますけど。

・民間での関心の低さ

今モチベーションが下がりすぎちゃって、山に関心がないんですよ。多分日本中そうだと思いますね。

・植え方までこだわる人は少ない

これから400年かけて育てるということになる、誰が責任を取るんだということもあってですね、難しいと思うんですけど。何か、400年を目指して、例えば立松和平さんが、古事の森を始めた時に、事業を、立松さんともちょっと話していた時に、やっぱり400年後に文化財になるような木を育てるんだっていう、そういった取り組みを今から始めたいんだっていったみたんですね。ただその植え方にはやっぱりこだわれないので、加子母にもあるんですけど古事の森が、やっぱり普通の植林になってしまっているんですね。普通に富士山の裾野から買ってきた苗で育ててる、植えて、直根切った苗を相変わらず植えているという。

・加子母内での主張

辛いですね。これはね、とても僕がこのコミュニティというか、社会に、次の世代になら言えるんですけど、この町で言うと新参者なのでまあ、今の世代がある程度抜けちゃえば良いんですけど。ただ僕の言葉じゃなくて彦七の言葉で伝えるっていうのが大事な部分じゃないかって思いますね。じわじわと

・直根の必要性

それ（直根のある苗）によって、成長が大変かかるってこともあるのでそれをどうして良いか。天然木を育てるっていう、種からとかせめて直根のある山引き苗から育てるということを実践していかない限りは、いつまで経っても同じことが起こってくるということですね。やっぱり日本全体の山に関して、自然から学ばなきゃいけないっていう。決して自然界では直根切ってっていうのはありえないじゃないですか。ある時断層が起こって切れるってことはあると思う。それはもちろん成長不足でも申しませんが。

直根切るっていうのは実はひょっとするとこれ、樹齢100年超えた時に日本中の山が枯れだすかもしれないですよ。寿命を全うできないかもしれないんですね。健全な木じゃないんで、揺れるでしょうし、地震で揺れて、台風で揺れて、根元が緩むとかだから街路樹なんかはみんなそうですね、倒れちゃいますよね。木が台風で倒れるなんてことはあってはならないことなんでしょうけど、それがいとも簡単に今倒れてるし、戦後、昭和40年代ごろから

街路樹をどんどん植えてますけど、あれがこれから倒れだすんでしょね、きっと。東京みたいな、表土が深い、関東ローマみたいなところはいいんでしょうけど、浅いところは剥がれて倒れちゃいますね。街路樹もコンクリートの鉢にスポンと挿しちゃうだけで。北海道なんか札幌やら、道路沿いにバーっと植ってるじゃないですか、こんなに成長しているじゃないですか、開拓 100 何十年経っているのに、あれが 1m くらい直径があるポプラなんか倒れちゃうんですよ。ものすごいことですよ。

東北の震災の時に津波で倒れなかった奇跡の木とかありますよね。ああいうのには直根があると思うんですよ。たまたま植えた中でも直根があったものなのか、それに匹敵するものが、あった木が津波にやられなかったということでしょうけど、海岸線も、昔の人は三保の松原とかも昔の植え方なんで、その辺は考えて植えたと思うんですけど、そう言ったものは何回か津波にあっても生き残っていると思うんですね。

地上部はどうしても価値があるし、重要なのでそちらに視点がってしまうんですけど、実は目に見えないところが 1 番大事だっているのが大きなところで。

あの 700ha の山（「木曾ヒノキ備林」）、たまたま土砂崩れがあったところがあって、直根のあったヒノキが立っているんですよ、土砂崩れの現場にも。だからそういう証明を、先生なんか見ればわかると思うんですよ。これはこういう理屈で難を逃れているんだよというように言えると思うんですよ。

・国有林での実証実験

要は政府として、国として林野政策の欠落した部分というかその方向性っていうのを舵取りが今なかなか変えれないというのが今あるんですね。それはもちろん住宅メーカーやら、いろんな業界との関係があるので今 400 年サイクルの森づくりを始めましょうって言うてもなかなか難しい話なので、それができるのは実は国有林だと思うんです。国有林で実証の実験ができるのは間違い無いと思うので、民間レベルでやろうと思うとなかなか難しいと思うんです。ただ、年寄りばかりになってきて日本全国山村が高齢社会になってくると山へ行く人がいないし、そうやって山を育てていくしか無いと思うんですよ。

・間伐、皆伐による天然更新の促進

そのためには今育ってる木を伐らないといけないんですね。これが災害の原因になるので伐っちゃう。伐っていったん広葉樹っていうか、それをエネルギー山、もしくは肥料山、昔の姿にしてからやるのか、それとも今のままの間伐をしてその間に直根のある植物を植えていくのか。自然界の植物は当然直根はあるし、広葉樹は当然再生可能なので永久に、冬に伐れば絶えず萌芽によって永久に育ては伐って育ては伐ってができる。針葉樹は伐ったらそれで終わっちゃうんであれですけど、そういうことが可能なので。ある意味、広葉樹を育てた方が生産力は高いですよ。木材としての、楽だし。広葉樹なら伐るだけですから、時期さえ間違えなければ。夏の萌生の時に伐らなければいいんですけど、休眠期に伐れば、また次の春になれば出てくるので。

・人工林（直根の取り除かれた木）による災害

今の木が邪魔になりますよね、それが倒れたり、表面がその、表面にポットが並んでいるわけじゃないですか。自重で表面がずってくるんですよ。ずってきて上の方にクラックが入ってそこに水が入って深い円弧滑りっていうか、深層崩壊になってくるんですね。立ったままズ

ズズって、これからの災害の方式はそれです。それが谷を埋めて一気に土石流になるような。それが日本全国で起こると思います。だいたい映像見てもニュース見ても土砂崩れがありましたっていうとだいたい人工林が多いと思います。

取材するメディアもみんなそれを見て人工林で起こったって風に報道されてないっていうか、そこに気づいてないってことですね。これが何で起こったのかっていうのが、雨で崩れましたって、非常に雨が降ったから起こったんですよって。去年の台風 15 号も電線切って地方なんかはね、長い間停電になりましたけど。何で木が倒れたのって話にならない、台風で木が倒れるっていうのはおかしくないかなっていう、報道はされない。その辺の視点がもう無い、もともと無いっていう意味です。植え方に問題があった。

・昔の人の体型

もう、山を管理できないんですよ。皆さんの体型も、この辺の人たちの若い時の体型と違って進化しているので、進化しているのか退化しているのか。体力的に、昭和 30 年代に苗を何十本も背負って山へ行って、朝から。

何十 kg、100kg 近いものを背負ってって、そこで木を積んで、また引きずって降ろしてくるっていうような、過酷な労働に耐えられる体があったんですけど、今もうダメじゃないですか。昔の人は手もでかいし、足もでかいし、骨が違うんでしょうね。

セメント袋が 1 袋 60kg だったのね。その 60kg のものを持って砂防工事なんかは登って降りてしてたんです。だからあれが 60kg 持てなくなって 40kg になったんですけど、さらに今 20kg くらいになってるかもしれませんね。60kg のセメント袋なんてとても持てない。それを 2 つ持ったなんて人もいるし。でもみんなその頃にやってた人は今、腰や体痛めてますよね。年取ってから。

木の桶みたいなのにごはんを詰めて、蓋の方にも詰めて、合わせてそれをお弁当として持っていくんですね。それぐらい食べないと仕事ができない。

・江戸時代の植林の失敗

彦七が江戸時代もやはり植林を奨励しようっていう尾張藩からの指示があるんですね。ヒノキの苗を育てなさいっていう、発芽させて育てなさいっていうのがくるんですけど、彦七は発芽率が悪いってことでダメだったっていう文章を送るんですよ。実際はどうかかっていうと畑に撒いてもヒノキの苗は育てられるんですよ、今。戦後は各家庭でヒノキの苗を育てていたもんで、戦前も。だからそういうことができるのに、なぜか成績が悪くてできませんでしたって報告の文章を出しているっていうのは何か意味があるのかなっていう風な気がします。その後に発生する、例えば植林をすることで発生する過酷な労働とか、その他いろんな、村人の過酷な状況を分かっていたのかもしれないですね。当然下草を刈らないといけない、間伐もしないといけないっていうことになるんですね、枝打ちをしないといけないっていう仕事その後、発生してくるんですよ、植林をすることによって。下草刈り、枝打ち、間伐っていうことは、昔はやっていない仕事なんですよ。それをやりだしたのは昭和になってからですから。過去、そんな下草刈りなんてこと昔の人がやった記録がないんですよ。

・木材の使い方

その過酷な労働を戦後やったんですよ。やってこの山にしたんですけど、それをダメだった、間違いだったっていうのは、今大きい声では言えないですし、それによって成果は出てこれだけの木が育っているのは事実なんですね。だけどそんだけのことで、1本1000円にしかないっていうのはあまりにも悲しい話なんですね。それで1000円で取引しようという魂胆も許せないっていうのもある。なるべく安く手に入れて合板にしたり、チップにしたり、ましてや燃やすなんて、燃やしてエネルギーにしようなんて考え方もあるんですけど、あまりにも悲しい話ではあるんですね。まあ時代なんで仕方がないんですけどね。もっと有効な使い方が多分あるでしょうし、もっと小さく付加価値の高いものを軽くして、多分製材所っていうのはこの高齢社会では成立しないんです。建築材を生産するっていうことは、多分結構大きな大規模資本がきて、そこで木を伐採して持っていくしかないんで、これを零細の事業体が行っていくのは難しいので、むしろ年に、もちろん広葉樹にして豊かな多様性のある山にしたあとの話なんですけど、1年に何本か自分で行って伐ってきて、それを小さなおもちゃみたいな付加価値の高いものを作って、教育玩具とか、そういったものを世間に出していくっていうような、そういう方が現実的っていうのもあるんですね。教育玩具なんかは本当に今8、9割近い、日本で生産している教育玩具ってないんですよ、木の。ほとんどドイツやフィンランドの北欧、デンマークとかあっちの方から輸入しているものが多くて、オリジナルの日本人のための木工のおもちゃっていうのが全然無いのが現実なので。ちゃんとそういった教育方面の人たちとかいろんな人、特に域学連携なんかいいと思うんですけど、いろんな頭脳を集積して知育玩具を作ってっていうのも面白いと思うんですよ。

・一つの解決方法

1つ解決策があるのはさっきの森林環境税を使って、今立っている立木を買い取ってもらう。全部現金化しちゃうとですね、そこへ、奥山や勾配の緩いところは生産地、もちろん林道の近いところとか、そういったところは積極的に植林をして植えて育てていけばいいと思うんですけど、里山、里山から200m、300mの部分は国が全部買い取ってそこを全部里山に変えていくとかね。木の実のなる植物とかそういった多様性を持った植生にすることで獣害の措置にもなるんですよ。イノシシやシカや、食害、そういったものが里に降りてくるというのもそこで抑える、っていうかそこに食べ物があるので出てこないだろうっていう考えですけど。そういった面ともう1つ、今、スギやヒノキだけで建築材を考えているんですけど、そういった多様性のある森を育てれば、この家もそうですけど、クリとかマツとか、ツガとかケヤキとか、そういったもので家を建てるというスタイルにシフトしていくと、逆に今度使う側が変わることによって、生産側が、山が変わってくるっていう形ですよ。ニーズに応じて、山に多様性が生まれてくるってことなので、ある山の持ち主はマツとクリとあれを植えるぞ、育てるぞとか、そういう風に考え方が変わってくるじゃないですか。今はヒノキじゃなきゃ、スギじゃなきゃいけないって、頭の中で固定化しているんですね。カラマツじゃなきゃいけないとかね。それがそう色々引き続いてくると最終的に何になってくるかというところいう家になってくるわけですよ。いろんな材料使っているいろんな木を使って構造体を使って、作っていくってことになると、結局、最終的に石場建になってくるんですかね。昔の、古来の建築方法になってくるとすると、今度は耐震っていう問題点もクリアしてくるってことなんです。なにもコンクリートで基礎を打って、その上に針葉樹材を載せて、ヒノキやスギの建物を載せる必要がなくなってくるので、石の上に柱を載せるだけで十分、成立してくるっていうか。それぞれの腐らないクリ、粘りの強い梁にはマツとかツガとか、そ

ういったものを使えるってことになってくれば、原点回帰というか元に戻ってくるというか。石場建になってくると日本建築っていうのはいわゆる石場建っていうことになって大江さんなんかやっているああいう活動ができてくるってことですね。そうすると住み良い、クーラーとかそういうもので循環させるんじゃなくて、自然の循環の中で生活するような豊かな緩々とした生活が実践できてくるというか。本当の豊かさっていうのは今度のコロナウイルスで、こういうところで過ごせるのであれば、パソコンがあれば離れた仕事もできるという。ちょっと広い土地に東屋を建てて、そこで豊かな生活ができればね。自然のもの食べて、おいしい空気吸ってゆったりと生活するのが、本来は自然の営みっていうか。

・『文化財』創造プロジェクトについて

あんまり、分からなくて。退職の直前、僕 58 で退職したので、早く退職したので辞める時に色々、あんまり綺麗に片付けられないうちに、パーッと辞めたので、その辞める時に、この改修とか色々重なってあんまりしっかりと対応していなかったこともあったんですけど、確か登録をしたんですよ。うちの山の奥の方に一山あった、7 町歩、700ha くらいの山なんですけど、それ天然林なんですよ。その山を登録した覚えがあるんですけど、登録されたかは分からなくて、この間、速水さんが来た時に、その話をしたらまたちょっと話しておくって言って、それっきりなってるんだけど。なんで知り合ったかっていうと、東大の本郷キャンパスの講堂で、名古屋城の本丸御殿の改修と、江戸城の天守閣を作ろうっていうプロジェクトがあるんですよ、実は。そっちは全然進まないんですけど。その話をネタにしてそういう文化財を語ろうみたいなシンポジウムがあったんですね。そこで名古屋城本丸御殿の担当の今江さんって人が、ちょうど基調講演で行ったんで僕も聞きに行きますって言って、聞きに行ったんですね。その後懇親会があったもんでそこで、速水さんや関係者の方と話をしている中で、文化材の人たちが見えたのでじゃあ、資料くださいって話になって、こんな活動してるんだっていうような。

多分ね、個人で持ってる樹齢が何百年の木とか、そういうものを登録制度にして、もしどこかで修復の必要が出てきた建物に備えて、その材料を登録してる中から選んで使っていくっていうか、助けてもらおうっていうそういう活動だと思うんですね。そんなに無いんですよ。簡単に使えるような木ではないんで、活動もそんな派手にはできないというのもあると思うんですよ。やっぱり、計画的に結構大きな、例えば東大寺を直そうとかっていう話になった時に、材料どうするんだって話になると、どうしてもね、民間の材木商に頼らざるを得ないっていうことがあるので。もちろん民間材木商は、それぞれのネットワークで材料を集めるんですけど、今回例えば名古屋城の天守閣を直すってなった時も、加子母で 120、130 本くらいですかね、選木をしてそのうちから 10 何本か持って行きましたけど、そうやってやらないとなかなか木が集まらないっていうのが現実なんですよ。だから文化財を作るってなるとこれは今大変な状況になっているということで、森林は豊かに育て蓄積は十分にあるんやけど、1 本 1 本を見ると非常に貧弱な、産毛みたいな、歴史的に見れば、そんなような木ばっかなので、とても、1000 年前に当時の森林の状況から見れば、とてもじゃないけど文化財を修復できるような材料って手に入らないわけ、現実なんですよ。これは永久に続いちゃいけないんですよ、この状況が。どっかで歯止めというか考え方を変えて、やっていかなければいけない状況になるんですね。登録しようとしていたのは個人の山ね。そこにはいろんな、ツガとかモミとか。モミを登録したんやったかな。そういう何本かありますよっていい加減に書いて出したんですけど。認定式があって、感謝状みたいなのがあったんですけど、僕どうしてもその日行けなかったんですよ。大阪か東京の方であって、そこまで行け

るような環境になかったのです。ちょうどこっちで明治座の改修をやった時期ですね。余裕がない状況だったので。

・現在の状況

直根のある木を最初からじっくり育てていくっていう運動を展開していかないと、いつまで経ったって貧弱な木だけで作られた物がどんどんできてくる形になるので、量はあるけど質がないという現実が、当たり前というかどうかどうしようもない状況になっているというね。

・チェーンソーの登場

樹齢が100年超えてるのは当たり前なんで、100年くらい前の木って基本的には天然木が多いんですよ、その時期は。その頃積極的な植林っていうのはまだ行われてなくて、もちろん国有林では行われてたんですけど、民有林ではまだまだ坪植えみたいな、坪植えていうのもおかしいけど、育てた木を植えるようなそういった時期なので天然林に近いんですよ。まだ斧で伐っていた時代ですから、昭和30年代に初めてチェーンソーが登場して、それから皆伐が始まったんですよ。人間の力でね、チェーンソーみたいなことはできないんですよ。チェーンソーの出現によって森の姿が変わったっていうのは事実ですね。

・後継について

うちもね、後継がないので、っていうか東京で今働いているので、はっきりと言えない、偉そうなことは言えないんですけど、後継は困ってますね。加子母っていうたら本当に林業先進地と言われてた場所なんですけどね。現実には後継がないっていうかね。これから山どうするんだっていう、そういう状況ではあるんですよ。まあ、全国的にそうだと思うんですけど、山へも行かない、行くっていうのも山菜取りに行くくらいは行くけど、山の手入れに行くなんてことはまああり得ないですね。昔は山へ行くっていうのは、木を育てるっていうか育林のために行くっていうのが山へ行くっていう言い方だったんですけど、最近は山へ行かないんで、林道も草がボーボーになってしまっ。林道っていうのは絶えず車が通ると道を踏むので草が生えないんですけど、今は轍すらなくなってしまっ酷い事になってますね。それくらい山へ行かなくなってしまっ事ですね。だから、山が放置されてしまっんですよ、実際はね。山からお金が取れないって事で、長い歴史の中ではね、この加子母っていうところになんで人が住んでいるんだって話になるんですよ。本当はそこに産業があったり、米が獲れるとかね、なんか理由があっそこに人が住むじゃないですか。こんな山の中にポツンと2000人、関ヶ原終えたあたりにはすでに2000人くらいいたらしいんですけど、なんでなんだってなるんですけど、それは木があったから、木曾ヒノキがあったからなんですよ。山が生業のものにならなくなっってしまうってことは、ここで生きる価値がなくなるって事になるので、なんでそこにいるんだって話になっちゃうんですけど。それほど、本当に今、山の価値っていうのが無いんですよ。いろんなことを、山の価値がなくなってくるまでに、まだ山の価値がそれほど下がらないうちにいろいろ手を打って、産直住宅とかね、加子母っていう島から出ていく時に少しでも付加価値の高いものを出して外貨を稼ぐっていう考え方の中で、もちろん建築材を作ってるわけですから、建築そのものになって出ていくようにすればそんだけの利益がここにいる大工さんや、左官屋さんや、みんな懐にお金が入るって形になるので。それである程度は潤うこともあったんですね。でもそれもやっぱりね、限

界が起こるんでね、全員じゃないんでね。全員がお金が入るって事になればやっぱり木そのものの値段が上がって売れるっていう事になってこないとダメなので。昭和30年代にヒノキやスギを植えて建築材オンリーできちゃったので、もうシフトできないんですよ。シフトできないけど、今ある条件の中で、木が育っている中で、別のことができないかなって、建築材だけじゃなくて、何か方向性を見つけていく、山から何か利益を取れるようなものがないか探していかないといけないっていう時期に来てるんですよ。それがすぐにキャッシュになるっていうくらいの即効性がないとダメなので。もうみんな年金生活になってしまっていくんですよ。高齢化率が45%くらいまでいってるんですかね、今ね。例えばその家の高校生とかお年寄りでもう施設に入っているとかそういう人たちもここに籍は持っているけど、もうここにいない人を抜くとゆうに50%超えちゃってるんですよ。もう限界集落っていう、言われてますけど、そのラインに入っちゃったということなんですけど。限界集落っていうのは言葉の遊びで、実際は限界集落っていうのはあり得ないんですけど。それからこの山をどう使っていくかによって後継者が生まれるかどうかっていうのが決まってくるでしょうね。ここで一旗揚げするための何かっていうとなかなか難しい。まあ、作って売ってということになれば、それこそデザインとかソフトの方であれば、生活はできるでしょうけど、外と連絡取りながら。ここでものづくりをやっていこうとなるとなかなか大変な時期に来ていますね。それは加子母だけの問題じゃなくてね、日本中がそれで困っているの。ただ、条件は林道が非常に密に通っているとかね、水源がここが1番上の最上部だとかね、ヒノキっていうブランドとか、歴史的なものとかね、いろんな、条件としては非常に良い条件を持っている。とにかくヒノキなんですよ、歴史的には。だからそのヒノキを、まあもちろんかたや育てながら、木曾ヒノキを育てながら、かたやこちらでそれまでのうち何かしらで食っていかなきゃいけないという仕組みを作っていくとけないでしょうね。でも、今この60年70年はある意味ね、リセットして、またかかるんですけど。まあでもそれでもね、やっていかなきゃいけないんでしょうね。昔の山に戻していくっていうか、そういう行動を起こさないことには。でも別にそんなに大きなことじゃないんですよ、昔の山に戻していくっていうのは。自然の力を利用してね、自然の仕組みを理解していればできないことはないし、1番良いのは、300年前、1700年ぐらいにその行動を始めたぐらいに、実際にできたじゃないですか、実証できてるんですよ。その実証の経験さえはっきり分かってくれば、できないことではないことではあるんですよ。できるかどうかわからないような無謀じゃないかっていうことはないってことなんです。実際に先人はやったんだからっていうこと。実証されてる。まあ、この資料館はそういったものの蓄積とか情報がある程度持ち続けるっていうためにはいるってことなんです。何もなければ風化しちゃうんですけど。これも400年後どうなんだってことは、何もなければかもしれないですけど。でもそれこそ400年くらい、行動を起こして順調に持っていくにはここにあり続けなきゃいけないのかなって思いますけど。これね、全国の山が、山村が抱えている問題なので、ひょっとすると加子母に続けていうようなことになるかもしれないですよ。まあ、そういったシンボリックなものがやっぱりないといけないっていうこともあるので、ちょうど、藤岡先生含めていろんな先生が来てくれたり協力してくれたりということが最近多いので、まあそういった、悪い言い方ですけど利用して、そうしながら、これだけいろんな人が集まってくれるなら日本の山もなんとかならんんじゃないかっていうような気もするんですよ。みんな多分同じ方向を向いていると思うので。コロナウイルスも逆手にとって、山づくりの舵取りできないかなって。

記号	名前	聞き取り日時	2020年10月21日
A	内木哲朗	聞き取り場所	出之小路山
	所属・役職	山守内木家 20代目現当主	

・自分の持ち山について

山づくりと言ってはいけない、山を放置している。そんな大したことじゃなくて、本当に放置していて、自然にしておけばいいだろうというのが強くて。今は巨樹を育てようと。

・加子母の奥山について

一般に山を荒らしているという、昔の林業の言い方からすると。手が入らなくなって森の植生が豊かになってきている。林業って100点満点がないですから。今の林業も100年も経ってないですから、果たして正解かどうかはわからないですからね。

・江戸時代の森づくりについて

尾張藩の結果は出たってことですよね。それだけの材料を出せたという。300年間で育て上げて、戦後かなりの量が伐られて出ていったってことです。またやれば同じような結果を得られる。やればできる。ある意味、今は1700年代に戻ったってことです。人口林は植えていますけど、今から始めても遅くない。人口林はなるべく消化して、つなぎとして商用して、一方で木曾ヒノキを育てて行く努力をしていきたいと思います。育てて行く必要はあるってということだと思います。

・木曾ヒノキの育て方について

やっぱり植林方法だと思います。直根のある、山引き苗などを丁寧に植えて行く必要がある。実生では時間がかかりすぎるので無理じゃないかと。

・どういう人たちが実際に山引き苗を植えていたのか

杉や桧と一緒に作業していた人がやっていたと思います。山守が率いているわけじゃなくて、杉組があったのでそういう人たちが上松の木材奉行所の指示で動いていたと思います。山手代と一緒に動いていたと思いますね。

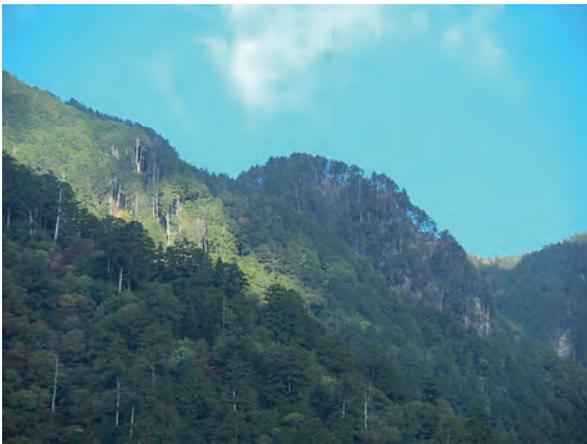
・山守について

山守は管理をするという形で、植えるとかの指示もしています。今年何を伐るのかとかの決定をして立木に刻印を打つ。あとはその刻印に従って杉の人たちがやるという。元々、山手代の仕事、権限だったものを山守が取り上げたということもありますね。初代はなかったんですけど、2代目から段々と。そういうふうにして自分がいないといけないような状況に持っていくんですね。そして山守の役割、仕事の範囲を広めていく。藩もどういう仕事をやれって定義付けが無かったんですね。自分で定義付けしていくっていう。武久のお父さんが山守に就いて、自分が2代目が継いでいくっていうのが面白く展開していくっていうのができますから。最盛期は14代目(内木家当主として)の頃になってきますね。1830年頃ですね。

ちょうど天保9年の日の丸御殿が燃えて大量に木が出て行く時の山守だった人ですね。その時に初めて藩士録に載る、登場するんですね。それまでは百姓でもない、武士でもない中途半端な立場だったんですよ。士分ではあったんですけど、藩士録に載るっていうのはまた別なんですよ。初代からやってきた功績が認められて5代目で初めて藩士として認められた。

・ 樹形について

上の方のもこもことしているのが天然林で、上がツンツンしているのが人工林です。樹齢が100、200、300年となっていくと上の方が丸みを帯びてきます。樹形が変わってくるというか、丸みを帯びてくる。あの山は樹齢が300~400年くらいのヒノキが中心ですね。



天然林の樹形



人工林の樹形

・ 国有林の現状

戦後、広葉樹を根絶やしにしてヒノキやスギだけを残していったんですね。だからヒノキだけの山になったんですけど、ある程度こういう風にあまり手の届きにくいところは広葉樹が生えてきますね。結果的に混交林になっているという。頭が出たら大丈夫なんですけど、頭が出るまでは下草刈りをするということを今までやってきたわけですね。それが大変なんですよ。昔の人（江戸時代の人）はその下草刈りっていうのをほとんどやっていない、というよりやっていないはず。下草に勝ったものが山守が管理していた山っていうのは樹齢の幅も今とは違う。この辺はせいぜい数十年の差ですけど、何百年という差だったんですよ。何百年という山であることで、1本伐ることでその下から実生が生えてくるというような、そういうローテーションが起こるんですよ。こういう山ではそれが難しい。

元々、全山が尽山になったんです、太い木が伐り尽くされて、300年前に。ただ、細い木は残ってたと思うんです。人工林だったら30年くらいですけど、天然林だったら100年くらいかかるような太さのものが。その残ったものや山引き苗を植えながら、下から生えてくるのを促しながら、そして全山が明治の初め頃にはああいう山（樹齢200年以上の木があるような）になったんですよ。そして明治の初め頃から伐っていくんですけど、その頃は斧なのでそれほどでもないんですけど、昭和30年代からチェーンソーが登場してくるんですよ。そうすると、何万㎡っていうのをどんどん出していくわけですよ。それでほとんどこの山っていうのは伐られたわけです、太い木は。皆伐ですね。その後人工的に植えたのがこういう木ですね。大体今で70年生くらいですね。ただ徐々に、向こうの入り口の所、森林鉄道が入っていたところは明治の時代に植林が始まっているので。今回の遷宮の斧入れ式は明治39年に植えたものが使われましたね。事務所が記録しているので、昔もほとんどの山の履

・加子母の山のヒノキの群落

そういう傾向があるんですね。そういうのを阻止しているのが群落だと思うんですけど、ここはヒノキの群落があるんですね。それが自然にできたものなのか、人為的にできたものなのかは分からないんですけど。この辺はスギも生えるけど、気温や標高があって生えるけど育たない。オーラというかフィトンチッドみたいなもので同種でも育たせないというか、自分が生きていく中では。全山としてヒノキ以外は生かさない、殺しちゃみたいなの。

・御神木の伐採

神様が入る1番大事な葛籠を作るんですね。向こう側に、足場が組まれてみんな座って、正装して、こちらを見てるんですね。そして三ツ尾伐りをして、2本のセンター部分を延長した方向に倒れることが分かります。細くなって3点で立ってて、1点ずつ折って行ってこちら側に倒すという方法です。下をこれだけ残しているのでも中で裂けることもない、素直に倒れるということですね。倒す時に内宮材と外宮材の木が「人」の字になるように倒します。ここで伐られたものはここですぐに6mぐらいの寸法に合わせてトラックに積み込まれます。架線に向こう側と繋いでいるので吊り上げて下ろすんですけど、その段階で伐り口を斧で菊の紋にします。16紋の菊の目みたいにして。トラックはおろしたての新品の物を使います。ナンバープレートも2015とか0001とかそういう番号をわざわざ取って、まっさらのトラックに積みます。それも全部企業努力ですね、請け負った会社が責任を持ってやるという。そういうようにして御神木は伐られているんですね。遷宮が平成25年だったのでその8年前、平成17年に伐ったんですね。御神木は8年前、1番最初に1本伐るやつが16年前に。だから遷宮が終わってその4年後には次の遷宮が始まっていくってことですね。



内宮材伐採跡



外宮材伐採跡



菊の紋

・登った場所の植生

登ってきた方向から見て左側にヒノキがたくさん生えてます、で右側を見るとサワラがかなり。ここはサワラとヒノキがせめぎ合いをしている場所なんですね。ここでヒノキの大木を2本伐ったんです。で、本来は倒れてその下にヒノキが出てくるといいんですけどサワラが出てくるんです。面白いことにバンッと倒れた多ところに沿ってサワラがザッと生え出すというか、そのショックでスイッチが入るのかもしれないんですけど、そういう傾向があるんですね。別のコースでも、一回倒した場所に、線状に苗が生え出すという傾向があるんです、一概に全部とは言えないんですけど。で、この全体で生えているもののほとんどはサワラです。でここから一步上がっていくと、今度はヒノキの極相林になるんです。そして尾張藩が目指したのはああいうヒノキの山なんです。あれも細く見えるけど、近くに行くとすごい木なんですよ。樹齢が大体300年から400年くらいの木。みんなこういう(御神木として伐採された)ような木ですね。



ヒノキの極相林

・昔の人の植生のバランスの取り方

昔の人はバランスを取るためにサワラを上手に撃退しながら、ヒノキを優先的に育てていくという技術を持っていたんですね。今は、抜き伐りすると、後は勝手に生えてくるだろうという考えでやっているのどっちかっていうとサワラが増えていくという傾向がある。難しいんですよね、なかなか。サワラは昔は80cm(根元径・胸高径で)を越えると伐っていたんですね、今は伐っていないんですよ。80cmを超えて1mになっても全然伐らないので、多分中はウロになっちゃってます。腐りが中であって空洞ができちゃって、材料としての価値が無くなるので、昔は80cmを超える前に伐って材料にしていた。それがバランスを、次の世代を繁殖させない手立てだったのかもしれないんですけど。極力そういう形でヒノキ山をつくっていきこうっていうのが、最たる目的だったので。サワラは欲しくないけど、ヒノキは欲しいっていうのが本音だったと思います。

・目通し(径)について

目通しっていうのはある意味理屈に合っていて、昔は製材技術があまり進んでいないので、どちらかといえば「割る」なんです。ノコギリっていうのが縦切りっていうのが難しかったので。根っこのずっと伸びていくカーブが終わったところで伐るんです。だから昔の伐り口っていうのは高いんですよ。ここから1m、2mっていうのもあります。特にここはこういう風なんで、櫓を組んで斧で伐るといふ。今はそうじゃなくていいけど、結局根元の部分

はいらないので伐らないといけなくて、真っ直ぐになるところから材料としてカウントしていたんですね。そこから下の部分は、地元の人や杉の人の燃料とかもしくは小さな木工品を作るための材料として払い下げられるように残していたんですね。まあ、ここら辺のことは数字が出てこないのでもあまり分からないんですけど。でその伐るところの位置が大体目通しかそれ以上になるんですね。タコの足みたいな部分はいらないですからね。だから古い材料なんかは三ツ尾伐りで伐ったような跡があるんですね。

・三ツ尾伐りの練習

三ツ尾伐りをやる人たちもいなくなって、大径木が無いから練習ができなくて、モミでやったり、大変な苦勞をしているんですね。保存会もあって。20年に1回なので、20年前のチーフが亡くなってしまうとダメなんです。だからそういうこともなんとか継承して、伝統技術として残していくっていう大変な努力がある。

・根について

尾張藩が目指したあの極相林とか、天然林というから自然にああなったって思うけど、実際は人為的な作用で、人の手が入っているので必ずしも天然林ではなくて、半人工林のような位置付けをしてもいいと思う。大事なのはこれだけ太くなくても根っこがしっかりしているということ。根っこも同じような太さで地下に眠っているということ。上の材積と地下の材積が多分同じくらいだと思うんですね。掘ってみないと分からないんですけど。根っこをもし掘れるならそれがすごくいい材料になると思う、いいビジネスになると思う。その根っこも100年200年腐らずに残っているので、アンカーを打ったような状態で、それが山にいい、災害に強い。そういう風に山をつくっていけば、小さなコンクリートダムを減らしていけるということですね。崩れるとすぐにコンクリートダムをつくって、すごいお金をかけていますけど、それを極力減らして、コロナ対策とか子供の対策とかに使ったらいい。

・3年前の遷宮の斧入れ式

遷宮の斧入れ式で今回は史上初めて人工林を伐ったんですよ。明治39年に植えた。人工林ですけど、太いので。まあ、太いって言っても木曾ヒノキ備林と比べると細いんですけど。3年前の11月くらいに伐ったんですね。少し寂しい感じですね、樹齢が100年ちょっとで。



遷宮斧入れ式で初の人工林を用いた跡

・護山神社について

奥社は車で行けない、谷まで降りないといけないんですね。平な部分があるんですけど、そこに神社があってもしかしたらそこにベースキャンプがあって江戸城の日の丸御殿の一級材を出す場所だったかもしれない。けどそれがよくわかっていない。場所も特定できていない。そのこの平なところに立っていた超巨大ヒノキ、御神木とされてた「カナテコ」という名前の木がその時にいっしょに伐られちゃって、それで非常に不吉なことが起こってですね、その措置として神社を、ここに奥社をつくってそれから里宮も建てて。山を鎮めるための神社という意味合いが強いんですね。今は伊勢神宮の式年遷宮の最初の出発点となるので、あそこに一晚安置して。

・裏木曾古事の森

やっぱりね、立松和平さんがご存命ならまだまだ広がっていったかもしれないけど、ちょっと停滞しているというか。植林は補植という形で木々の間に植えたという。今となっては、植林方法から考え直さないといけない山であるんですけど。

・自分の考えについて

平成16年頃は、実は僕も全然直根との結びつきってというのは考えてなかった。木曾ヒノキと一般のヒノキの違いっていうのをどういう風に区分すればいいのかなと考えていて、文書の中に山引き苗の話が出てきたりして、それは順調に木曾ヒノキとして姿を変えていくのに、植林したのはなんでなのかなと考えていた。ひょっとすると気候とか温度、土壌もあるんですけど、決定的に大きいのは直根なのじゃないかと思い始めたんですね、直根が無いと木曾ヒノキにならないんじゃないんかと、仮説を。言い切れないんですけど、そういう傾向があるんじゃないかと。それで山寺先生のところに話を聞きに行ったら、「それはあるぞ」と、メールとかやり取りしている間で、直根を切ることによって地上部の成長は良くなる傾向はあるから、尾鷲の速水林業さんに苗を出荷している先輩がいるんですよ、辻井さんって。その辻井さんところに行って、話聞いたらやっぱり直根は切っていると、苗の直根は切るからそういう傾向はあるだろうって。そしてみんなそのすくすく育つのを欲しがらるからそれしかだめ。早く育てていいものを、通直なものを育てていくっていうのがこれまでの林業なので、1世代とか2世代で出せちゃうので今は、5代も6代も後にしか伐れない木を作って何になるっていうので、それはもう林業じゃないのでね、考え方が、今ではね、昔は継続していくので。最初から木曾ヒノキと一般のヒノキが違うというのは感じていて、仮説というかそういうのはあったけど、こういうところではなかなか言えなくて、60年前、70年前の拡大造林なんだったんだということになるので、真っ向から反旗を翻す形になるし、東濃桧の産地に木曾ヒノキで殴り込んでどうしようもないじゃないですか。だから今も公に話すときは、木曾ヒノキは木曾ヒノキ、東濃桧は東濃桧で使い方と値段も違うし、戦後の高度成長の社会に貢献したのはそういった東濃桧なんだよと。でも実際は違うんですね、東濃桧はまだ貢献していないんですよ、育っているんで、最中なので。戦後に貢献してきたのは江戸時代に育った木が伐られて市場に回ってたっていうのですから。その残りを使って、貯金を使って食い潰してきたってことですね。林業振興会にいた頃（平成20年頃）から思っていて、ひしひしと感じていましたね。それもあつたし、森林整備にばっかりに一辺倒になっていたのになかなか難しいんですね。そもそもそういう話を出しにくい。藤岡先生が明治座の改修をやった頃から太田先生と出会ったりして、『江戸の森林学』とかの本の中でも、文書の中では

記号	名前	所属・役職	聞き取り日時	2020年9月7日
B	梅田紳一郎	加子母総合事務所主任	聞き取り場所	加子母総合事務所
C	伊藤満広	加子母むらづくり協議会会員		

・古事の森について

[B] 資料のようなものを探せばあると思う。それこそ満博くんの方からの資料だけなので、それがどれくらいのものなのか。
 いつもは古事の森の主催でヒノキ美林のツアーがあったりするんですけど、コロナで今年は何もできん。

[C] 最初は立松さんの提唱された古事の森ってということでちょうど神宮備林の入り口のところ、三叉路のところ。
 この間伊勢神宮の式年遷宮の斧入れ式を初めて人工林、植樹した木を切ったんですけど、それが古事の森のエリア内なんですよ。はじめは本当そういった森を守っていこうっていう活動でスタートして。その後国有林、神宮備林の方も今までは視察ではないと入れなかったんですけど商業利用っていうか有料ガイドとして案内するっていうことを国の方が地元の方でそういう協議会を作れば協議会に委託する形で活用してもらってもいいですよっていうことになっていて受け皿に、元々裏木曾古事の森育成協議会っていうのがあってガイドなんかもやり始めたところだったんですけど、このコロナの影響でなかなか市の方も新しい環境資源ということで、何とか活用していければということになったんですけど。

[B] 裏木曾古事の森育成協議会っていうのがあるんですけど、そのメンバーっていうのが一般市民的なのはなくて、林業グループの会長さんとか、商工会の人とか、森林組合だったり林産組合あたり、あと渡合温泉の代表さんも入っていたり付知と加子母それぞれのまちづくり、むらづくり協議会もう一度名前を連ねているんですけど、基本的に動いているのは森林組合とか林業グループとか、その辺の方々が動いておられるということでガイドツアーだとかっていうのも今月中に事務局があるので付知町さんの方で受付をしてもらって連絡をするとガイドさんを派遣するっていう形でツアーをやったりとか。
 古事の森そのもののツアーは無いですね。木曾ヒノキ備林と一緒にツアーはある。

[B] 場所柄、付知峡の向こう側の中学生の方々が下草刈りをやるとか運営を中心的にやっておられる方が別の林業グループの方なので付知の子たちなんかを下草刈り体験をそうさせる場所として使われていますね。加子母としてあそこで活動するっていうのは未だにないですね、今のところ。なんとなくこころ辺りとか、ほとんど知らないですね。僕もここ数年でようやく気がついてきたことなんですけど、加子母の人が渡合っていう地区に行ったことがない人が結構いるんですよ。私も行ったことないっていう人たちが北檜の立派なところがあるっていうのは、なんとなく知っているぐらいなので昔はもっと知らなかったくらいで最近テレビなんかでいろいろ取り上げてもらってるのでなんとか、知ってるくらいのことで実際そこに行ったことがあるかっていうと行ったことがある人は少ないなっていう感じは持ってますね。なんで、この古事の森は渡合に行く途中、全く途中の所の道の両側にあるので本当に通るときに見えてくるんですけど、それすら見えてないっていう看板は一応立ってるんですけどあんまり立派な看板という感じじゃないんですよ。もともと森林施業はされていて、そこをその当時の東濃森林管理署の組合長の人との話し合いの中であそこを将来の木曾ヒノキ備林じゃないんですけど。木曾ヒノキ備林ってすごくもう、樹齢何100年なんでそこ

まで行かんでも 200 年くらいまでに出せるちゃんとした木っていうかそういう木曾ヒノキを出そうっていう。今実際に立っているのは多分 150 年かなんかくらいだったと思うんですけど。文化財を作るのにすべて 1000 年のヒノキがいるってわけじゃないので、当然そのヒノキだけじゃなくてスギとかケヤキとかいろんな木がいると思うのでヒノキも建築材として一番優良だと言われてはいますが、使う場所がいろんなところがあるのですべてがすべてそれである必要はないということで、立松さんはそこら辺に目をつけたのかなと僕は思っています。

・木曾ヒノキ備林について

[B] もう完全に木曾ヒノキ備林についてはもう別格な森なので、今もそうですし、で使える木材も本当、年に、1 年に伐り出せる量なんて 100 本にも満たないくらいしかでてないはずなので。伊勢神宮も聞いてみるとあそこまでの樹齢はいらないうって言うことで。神宮の森って伊勢神宮の裏山にあるので、あの面積がもうあと 100 年いかないうちで使えるようになるらしいんですよ。なんで、あそこから伐り出しをできるようになってくるとこっちはもう使わなくていい。いやそういう感じで場所によってはその木材じゃないって話もあるらしいんですけど、そういう使い方になってくるという将来。今でももう 2 代目大ヒノキくらいのレベルの太さの木っていうのが本当は欲しいらしいんですけど。ある場所によってはちょうど伊勢神宮の神宮のなんか本当の神殿ですかね。中に入る時の扉は 1 枚板じゃないととかっていう話を聞いたことがあって、その 1 枚板を作るには 1m 以上の柱目の板がないと出来ないそうで、それを作るとなると相当の年数のものがあるという風に聞いたんですけど、今とてもそれは生産できない状態なので、今は張り合わせで 2 枚を 1 枚板にして、それを両側に向けて開けるようにしてるっていう。もうそれは 2 回くらい前の遷宮の時から採用しているみたいでもう手に入らなくなるといって、まさか台湾ヒノキを使うわけにはいかないって話なのかも知れないですけど。

ただ本当に 1 枚板で扉板を作るまでの木がない。古事の森はそこまでのものじゃなくていいのでちょっとした 30 センチくらいの柱目のやつが採ればいいのかということだとすると直径 60 センチとか胸高でね。そうすると大体ヒノキで 100 年から 200 年くらいはいいかなという。

昔からあそこは立派な木が、伐り出しできなくて残ってただけのことなんだろうけど当然伐り出しやすいところからどんどんどんどん切っていたので元に戻さなきゃいけないってことで植林はされていくんで、ただ割とその何 10 年単位である程度方針が変わるといってかどう聞き方をして行くかだとかその国の考え方が変わってくるのでこの山はこういう施業、この山はこうするようにしようというようなやり方に変わっていて。昔は木を一斉に伐って、一斉に植えて前みたいに何回か大きい木を作ってたっていうような感じだと思うんですけど、今はここはこういう山にしよう、ここはこういう山にしようという風で国は動いてるはずなんで。それが私たち民間の山も一応そういう施業計画みたいな計画を立てて伐ったり植えたりしていくっていうシステムになっているので。古事の森みたいな感じである程度区画を決めてこの中ではこうやろうっていった場所が古事の森になったというような感じで思って貰えばいいのかなと思うんですけど。

[C] 自然保護団体が神宮備林とか木曾ヒノキ備林をどうしていくんだって、議論されることになって「温帯性森林樹林帯」っていうことで神宮備林も含めて木曾から裏木曾まで全体含めて木曾檜のエリアのどういう風に保存していくかっていう緩衝というかその周辺地域は

ちょっと緩い区域に指定して全体として神宮備林を守っていこうという計画を林野庁の方が立てて、その中で伊勢神宮の御神木を切ったりだとか当然その切っていくと文化財の建物が守っていけないので計画的に伐採していこうということをも認めてもらうためにもその計画を作った時の報告書の。木曾ヒノキ備林のガイドを始めることになった経緯だとか、どういう取り組みをやってきたかっていうことをまとめた資料。

[B] さっき場所によっていろんな施業がって言ったのがこの図面で言うゾーニングってやつです。ここはこういうゾーンでこういうやり方でやっていくっていうように。

[C] 区域は段階的になっているので神宮備林っていうのは1番核コアの部分、かなり厳密に管理していくってことで、周りは段階的っていう感じで、周辺のところは比較的、人工的な施業っていうかそういうのが行われている場所も含まれているので。ちょうど林業振興会に行く時に自然保護協会やなんかがね、いろいろざわざわとし始めて林野庁の方もきちんと対策を取らないとっていうことで関係する市町村とか中日新聞社の飯田さんって言う、そういう人たちにも入ってもらって計画を作ろうという。

・森づくりについて

[C] まだ林業というそのものの歴史が100年そこそこ今のその近代林業っていうのがそのくらいの歴史しかないのでは要はその山が加子母でもほとんどなので本当にまだ神宮備林みたいに200年300年というスパンでこれから考えていかないとこれが例えば伐期が来たから50年60年だから皆伐してなんていう同じようなことを過ちを繰り返すことはないと思うしそれに向けてやっぱり背景的にもね拡大造林の時はバーってそこら中にスギヒノキが植えられたけどここはもう元々潜在的にヒノキが伐れば普通に生えてくるっていうそういう土地柄なのでそこ本当にそういう背景と自然環境というかね、そこを活かしていくっていうのは加子母のスタイルとしては適してるって思う。

[B] 千坪割りで村民が急に財産もらって、山に貯金するっていう形で嬉しくて、一生懸命山仕事を、当時はあんまり、他の地域の情報も入らないですから一生懸命、木の手入れをしていい木を育てることができていい木ができたんですけど、また諍いがあったってのがあるんですけど、とにかく木はお金になる、特にヒノキはお金になる。戦後、木材が必要なときに供給できる、できたときに結構お金がみんな手にはいたっていう、40年代、50年代の手前くらいまではね。それで結構お金があったので一生懸命やったんですけど、それこそ輸入物が来たり、どんなものでも木ならいいやっていう状態になって、安くなってっていう形に追い討ちをかけるようになってどんどん意識がなくなって行っちゃってるというのがあるんですけど、僕らの時に比べると、今の子どもたち、若い子どもたちは加子母にちゃんとそういう木があるよっていうのを知っているはずなんですよ。教えられてきているから。僕らは一切そういうことを教えてもらってなかったんで。加子母にそういう立派な木があるって知りませんでしたから。知っているのは満博くんの家の近くの大きい杉の木があるとか、おごの大杉があるとか、僕らが知っている木っていうのはこれぐらいの木ですわ。子供の頃から木を植えるみたいな、拡大造林で植えるみたいな。どっちかっていうとヒノキって細い、小さい、ヒョロヒョロと伸びた

[C] うちの時はちょうど枝打ちとか、今は枝打ちとかするところはほとんどないっていうと変ですけど、ほとんど植えていないのもう間伐して伐っていくばっかりなんですけど、

まだ育林していると

[B]昭和30年代から40年代にかけて金になるからって一生懸命植えてったら今この状態で、欲に目が眩んだって言い方は良くないかも知れませんが、一生懸命木を育てるために夏のクソ暑いのに下草狩りをやったり、マムシやハチと戦いながらみんなやっていたのね、村民が、自分の山を育てるために。ずっと大体手入れが終わって、さあと思ったらドンと落ちてしまって。またそれを伐って、炎天下の中で草刈りをするのかっていうのを考えたときに、もう嫌だって、一周回って村民は疲れてしまっているところはあつて。もうあんなことはやりたくないなつて。ところがもっとずっと遡るとそれこそ内木家がやってた山造りに結局、戻らないといけないう感じに最近なつてきたなと思つていて、自分的には。拡大造林するためにヒノキの苗を畑で植えて、山に持っていかないといけないんで余分な根っこやらなんやらを切つて軽くして山にポンポンと植えるつていうやり方で拡大造林をやつていたんですけど、結局その動物の住む住処も侵略して行つたわけですから、動物の餌にもなる、それから畑で育てたものが山に性が合わないうつていうか、うまく活着してくれないんですよ。それでもそれなりに大きくなるんですけど、結局、今のちょっと雨が降るとすぐに崩れてしまふ根が張らない木になつてしまつたんですね、日本全国それが同じ状態になつていんですけど。ところが内木家がやってたのは木が地中深くまでいくつていう苗木づくりをちゃんと尾張藩の時代にやつていたわけよ。それを300年後400年後500年後につていうことでちゃんと時間をかけて育てるつていうことをあの時代にやつていた。それを真似るのしかないなつていうことで「美林萬世」になつていったんじゃないかなつていうのが僕のあれなんですけど。今もうそういう風に育てていかないと、自分たちの生きる生活空間も土砂崩れがあるかも知れないうつていうのに脅かされることにもなるし、動物が降りてきて田畑を荒らすし。ちゃんと共存する形をとつてやれば、やっぱりいい木になるし、いい木になればそれはそれでお金になるし。今でも森林組合でいい木はそれなりの値段で売れるけど、簡単に植えてほつたらかしの木だとやっぱり材料としては二束三文になつてしまふので、割りに合わん、でほかつとく、でまた崩れる。悪いサイクルになつちやつているのでそこは見直さないといけないのかなと思つていんですけど。

大量生産で大量消費しすぎかなと、食糧の余るやつ、フードロスみたいなね、あれと一緒にね、やたら木も切つて、木だからいいやつていうようなイメージがどうも付いていふような気がして。その本来の木の使い方じゃないんじゃないかと思ふような。

必要以上に人類は木を伐り過ぎているところがあるので、まあ、それは日本人が欲するから外国で木を切つていふのはあるのかも知れませんが。だから今こんな台風が来るとかそういうのにも繋がつていふのかなと、最近思ふように。昔、加子母はこんなに暑いことはなかつたんですけど、夏が無茶苦茶暑い感じになつて。僕ら子供の頃は暑いなんて思つたことがないくらいのところだつたのに。そうなつてくると今度は、加子母で育てた、加子母つていうかこの木曾地方で育てたヒノキつてもうちょっと北のほうに植生が変わつて行つたりせんかなと思つたりね。もうちょっと涼しい方へ。本当に木曾ヒノキ備林のところになつていふヒノキとここら辺になつていふ木と比べると、やっぱりここら辺の木は温室育ちですよ。あつちの荒々しいところに一生懸命根を張つて育つていふヒノキと比べたら、こつちは温室で大切に育てられていふ感じになつていふますから。

[C] 本当に、今その災害で言うとね、本当に戦後に真っ茶っ茶の土と木が流れてくるとこあるじゃないですか、ああいうのって元々はヒノキじゃなかったっていうか、きつとなかったところにヒノキを植えたからそういう風になっちゃったっていう、災害になりやすく。ここはもう地質的にも本当、全然その痩せているっていうか、ガラガラの、元々ガラガラの山なので、本当に育てるのにも、すくすくとは育たないっていうかね、逆に厳しい環境は整っている。加子母はそこを変えることはできるんだけど、他の元々ヒノキとかを植えていなかったところに植えたところ、人たちがまあ、きつとそれは同じように将来木材の需要が増えてくるってことで、一生懸命汗を流された山ではあるのでそれを全否定にするようなことになってしまうので。

加子母でも昔の写真を見せてもらおうと、加子母の山でもほとんど、ヒノキなんかはポツンと、広葉樹の山で本当にその間に残ったヒノキを多分戦後というかヒノキの値段がすごく良かった時なんかは国有林からはそんなに出せないっていうと変やけど、で民有林から本当に木曾ヒノキに準じるくらいの、今の東濃ヒノキとはまた全然違うヒノキだったと思う。材価が1/10になったってこぼされるんやけど、きつとその時の今の10倍やった時のヒノキっていうのは本当にその価値のあった、今の東濃ヒノキとはまた全然別物のヒノキやったと勝手に推測しているんやけど。まあ、当然その歴史もあるわけじゃないので元々、割ってもらった山の中に潜在的に育ってたヒノキっていうか。

割とそういう、環境的にもそういう土地なので加子母でしかできないって言ったら変やけど、温帯性針葉樹林帯の、要は国からコアっていうか、神宮備林に特化したのになっているけど、ここ一帯っていうのはやっぱりそういう環境があるんだなあ。

[B] だから多様性にならない状態のまま、今なっているので。それを今、森林組合が間伐して薄くなったところへ木を、また厳しく育ててもらう方へ植えていくって方法でいろんな世代を、という風に施業していかなあかんっていうことなんだと思うんですけど。

・古事の森が文化財のモデル林にはならない

[B] いわゆる東濃森林管理所の経営に基づいた経営がなされている。それで、ただしそういう名前をつけた場所、ちょっとそこを意識した、木の文化を支える、森における大径木の森づくり等の活動に関する協定書があるんですけど。あそこはそういうことを意識して作ろうっていう風に立松さんたちと考えた山がそこってことで、そこは本来でいうともうちょっとみんなに知ってもらえるようにできていかないといけない森なんだと思うんですけど。本当に昔、満博くんが言ったようないろんな木がある、多様性のある森っていうのはなかなか作りにくいんですけど。山の上ほうは、全部が今みたいに針葉樹だったわけじゃないので、もと、種なりはあるので多分、針葉樹を伐採すればその木ができてきて自然に昔の山に戻っていくと思うんですよ。

・多様な植生の森づくり

[B] 中島の社長さんも、加子母からクリだとかマツだとかいろんな木を出せるように、中島さんの目からするといわゆる加子母から立派な家を建てるための木を全部供給できるような形が理想じゃないのっていう。昔はいろんな木があったもんで、ヒノキだけじゃなくってね、クリやらケヤキやらも出せると。クヌギやらナラやらなんかも何かしら役に立っていたわけで、器になったり、家具になったりとか、いろんなものになるのでそういう山になればいい

と、あの方も言っておられるので

・先人の努力は否定できない

[C] 今の、苗担いで山に植えたって人はまだかなり高齢でご健在の人がいらっしゃるの、とてもその人の前でそういう、意味がなかったっていうようなことは言えない。これは本当に世代超えたスパンで考えてっていうかね、とても今、先人たちの思っているのを否定するようなことが、加子母全体だと思うんですけど、ちょっとできないっていうか、しちゃいけないっていうのがあると思うので。ただこの先ね、その世代の人たちが亡くなって、うちらみたいなのそんなに苦労してなくて山を、自分のところの山があるっていう人たちになったときに、本当にそこを、リセットっていうか戻すっていうか。

・補助金による施業の制限

[C] まあ、結果として今の状態だと間伐しながらどういう風に戻していくかっていうと、択伐、抜き切りしながら、その後植栽しないで、その自然に生えてくる木を育てていくっていうのができたらいいんですけど、結局今のやつだと間伐すれば植えなさいという、補助金的にね、そういう仕組みがになっちゃっているんで、じゃあ補助金に頼らないでできるかっていうと、民間では補助金使わないで、間伐できるかっていうとできない状態になっちゃっているんで

昔はあったんですよ。林野庁が、試験的っていうと変ですけど、長伐期育成循環施業のような名前だったりとか、今だと補助金の場合、間伐とか入れられる対象になるのが、例えば林齢が60年までの木とあって、そういう決まりがあるので。そこを崩しながら試験的に、60年もう伐期超えちゃって80年になっちゃっているっていう山は補助金を入れられない状態なんですけども、そういうところでも択伐してやっていけるようにちょっとそれ向けの補助金を作ってみたりしているんですけど、伐って何も造林しないっていうものへの補助金は、多分何もないんじゃないかな。

補助金のしがらみっちゃうのは、あるというかね、どうしても無視できないというかね、森林組合としても。当然植えて枯れちゃったっていう

[B] 私らは補助金に培養されてしまった。補助金がないと生きていけないっていうような感じ

厳密に言うと、日本全国同じくらいの時期に、同じような状態で皆さん拡大造林されていたので、今むしろ自分のところの山、全部伐ってしまって、今から育てた方がみんなと違うように植えられるからいいなと思う人は中にはいますから。みんなと違う時期に出さないとね、高いときに売り出さないと、一斉にみんな売り出すと、絶対価格が下がりますから。

・森林組合の新しい施業について

[B] まだ、あの構造ができてから歴史がないので。それこそ内木家がやってきた物と比べたら全然。あそこは充分に実証実験を何百年とやってきているのと、つい最近始めたところでは全然話にならないので、究極は尾張藩の林政改革なのかなとか思っちゃいますけど。

・千坪割

[B] 当時、幕府が滅びて国になったんだけど、国も持て余して自治体に渡して、自治体も急にもらっても困るよって話で、たまたまその時の村長さんが、みんな一生懸命にやるからやらせてみろって言うことで、小作人とかみんなひどい目に遭ってきている人とかは、財産が持てるわけなんで、山に心血注いで一生懸命育ててきたっていうのがあるんですけど、ただ今度はその細かすぎちゃって、ある程度の面積がないと回していけないっていうのが今はある。

受け継ぐどころか、子供に分けてる、不在地主に分けてるっていうところも増えてますから。なんで名古屋の方が見えたり、東京の方が見えたりとかっていっぱいありますけど。

[C] 昔植えたけど、まだお金になるには時間がかかるので親戚に途中まで植えて、親戚に買ってもらって元気にしたりとか。最初に区割りした時からいろいろ動きながら、中島工務店の社長さんが、お金に変えたいっていうと変やけど、他の人に渡らんように買い付ける窓口になってくれたりするんで、今一番の森林所有者は中島工務店。

[B] そうですね、農地をね、加子母は加子母で守っていかないといけないという強い思いが。当然その土建業もありますけど、自分のところの企業が発注受けたときに、例えば山に道を作るときに、全然話ができない人たちがいては困るのでできるだけ地域の人たちに持っていて欲しいっていうのが最初だったと思うんですよ。加子母以外の人に土地が渡っていかないように、加子母由来の人ならいいんですけど、いずれ全然関係のない、別荘くらの、山でキャンプやりたいっていうような人たちとかそういう人たちが出てきたもんで、そういう人たちは申し訳ないけど、自分たちの山を守るには自分たちで持っていようっていうのが中島さんの考えなので。ただ、それも限界があるので、中島さんも湯水のように使えるわけじゃないので、だんだん少しずつ手放されて、加子母以外の人を持っているということになっているんですけど。でもまあ、ある程度の面積がないと山が完結できないので、それをやろうとするにはちょっと千坪では足りないかなっていう。

そうですね、あんまり大きいとやっぱりなかなか手入れができないですから。ある程度、大きな、吉野のようなね、1000haとかね2~3000とかこの一山俺のところみたいな地主いますけど、そんなには必要ないので。そのうちがやっていると、100まではいかないと思うので何十haあればある程度自分たちで回していけるんじゃないか、愛着を持って育てていけるっていう。さっきあの林道がやりやすいんですけど、加子母がずっとやってきた、道を作って少しでも搬出にお金がかからないようにってことでやってきたんですけど、それも補助金が見えなくて、結局道を引くと、その道の周辺から何haは整備しなさいよっていうことになるわけですよ、これだけの道作るには利用区域は何haあって毎年どんだけ間伐を進めなさい、こんだけの森林整備をしなさいっていうのがおまけで付いてくるので。そうしているとだいたいああいう一斉林になっていってしまうっていう風にはなるんですけど。でそこから漏れた、利用区域に入らんとところが広葉樹になるのかなっていう感じ。

・今の施業について

[C] 本当にね、今の話、何区画分には何種類かの木が育っていないと、そういう施業方法に変わっていけば面白いんですけど。

今の災害なんかも要は人災じゃないけど、政策のせいだっていう声も出てきちゃったりとか、そういうのに繋がっちゃうんでしょうね。

[B] 最近つくづく思うのは、哲朗君の言うように直根のある苗を作ってそいつを俺らが植えてくしかないのかなって、それで昔に戻していくしかないのかなって。もうサラリーで生活するようにして、山は自分たちの生活を安定させるための、環境を保全するためのもので、たまにちょっとボーナス欲しいときに伐って出すっていうくらいで、利息みたいなもので。実生で出とるやつをそのまま育ちやすいように、苗作りを山の現場でやっていくくらい。もうちょっと時間が経てば、今間伐してだいぶ薄くなっているのですぐすると、陽が入って木が育ちやすくなるので、もう何年かは必要かなって思います。

今植えてしまっている木をある程度整理したら、次のやつっていう感じで。僕はとりあえずふれあいの館の裏には紅葉を植えましたから。一応あそこは皆さん通るときに紅葉山が見えた方がいいかなと思って、まあヒノキとかスギは残っていますが、紅葉はある程度薪にでもすればいいわっていう

個人で、自分のところの山だったんで。台風で木が倒れたもんですから。たまたま、岐阜県が森林環境税でそういう景観を良くする山にお金を出すっていうもんで、うち強度に伐って間伐を6~7割やってその空いたところに紅葉植えますって言って、まあそれも補助金なんですけど。ほんで、元々残っていた木は売れるのである程度利益はありますよ。数万円程度ですけど。

岐阜県独自の環境譲与税の前のやつでやった

ちょうど、4軒、それこそ内木さんのところもやりましたし、4軒で、その4人とも同じぐらいの歳だったもんで、伐ってやろまいよっていう感じですぐにまとまってすぐにできましたね。

・災害や住環境の心配

[B] 僕らは田舎に住んでるんで、裏山が心配やけど、街の人は別に心配じゃないので、当然造成地だったら怖いかもしれないですけど。そういう人たちが木に馴染むには、木造住宅に住んでもらうか、そういうおもちゃとか家具とかにちょっとこだわっていくっていうのはありますけど。そういう点で日本は家具類が、建物はあんまりあれなんですけど、家具類とか普段触るものに関してはあまりセンスが良くないなって思うんですけど。すごいいい人が作るとめっちゃくちゃ高くなるし、そういう風になるんでしょうし。僕らは裏山を安心した山になるといいなとか、動物の降りてこん山になるといいなとか

[C] 加子母そうやって考えられるけど、昔第二東名が出来た時に、静岡の山の中をずっと走るとったら本当に絵に描いたようなマッチ棒みたいな、植えただけでピョンピョンって、山を切り開いて、あんなもうどうしようもないっていう、しかも手も入れてないし。伐って自然に戻してあげた方がよっぽど国土のためにいいのになんていう。

結局、全国どこも同じような補助金の、基のベースがあるのでそいつを当てはめるしかないんやけど、今の譲与税とか、エリアごとにこういう山を作るっていう地域の中で決めた施業計画を立てて、強度な間伐をして、下の下層木を活かしていくっていうのを、そういう山作りを認めてもらって、それに対して変な縛りのない補助金っていうかそれに向けてお金を使ってくれれば、もっと全国の森林組合も、そういう風になっていかないといけないんだけど同じ加子母の手法でやれるかっていうとやれるわけじゃないし、その土地の森林の環境も全然違うわけやし、本当に目的っていうか、昔はその木材をお金に変えていきたいっていうのでスタートしてるんだけど、そうじゃなくて国土っていうか環境っていうか、そういう風にシフトしていかないと何にも変わってこないですよ。

・木材価格のバランス

[C] でも本当に、学者さんたち、純粹に考えればっていうと変やけど、輸出をちょこちょこやり始めているけど、絶対的に今、日本の山に育っている木材の量って、これから使っていく量の全部 100%国産材で家作っていきましようっていうくらいあってそこで使っていく木材のバランスって考えたら、そのバランスってかなりもう崩れちゃってるっていうか、そんなレベルじゃなくなっている。そこを適正化していかないと、全て適正化していかない。

・環境の厳しさ

[C] 山もガラガラやし、加子母の山は痩せてるっていうか

・東濃桧のブランド向上

[C] 加子母っていうとあれやから、中津川市ぐらいがね、東濃ヒノキっていうのを。今東濃ヒノキって言っても、ブランドの力ってのはそんなに無いわけなんやけども、この東濃ヒノキっていうのが、地域のブランド材だと言って、その地域だとしたらね、その地域でそういった背景があって東濃ヒノキを作っているって訴えた方が、その材としてのね、艶があるとか節がないとか粘りがあるとかって、昔はそれで評価されていたんですけど、その評価っていうのが今は薄くなっているっていうか、市場はそれで評価してくれているわけじゃ無いので、逆にそういう思いの部分だったりとかそのヒノキを作るための周りの環境だとかそういったところがあるって東濃ヒノキっていう、ブランドの意味合いを

・次の世代へ残していきたい

[B] 他の地区でも、本丸御殿のようなものを復元したいとかね、なんとか城とか。これでまた心配なのが温暖化で台風が勢力を衰えずにやってくる、すると木造危ないんじゃないとか、思われちゃうとか今警戒していて。沖縄とか石垣に行った時に木が結構同じ方向にバーっと、何があったのって聞くと、こちら辺だとね風速 60m とか吹くんですよって、木が倒れてはいないんですけど、活着しているんだけど、木がこうね、それが当たり前で、しかもこの辺りはみんな背が低い家ばかりで上を通過して直接風が当たらないようにって、防空壕のような家造りになっているので。ひょっとすると本土の方もこういう家づくりをやらないういけなくなってくるんじゃないかって、今思っているところで。本当にその歴史あるところも、全てが四方無地である必要はないのでそれなりの太さの木であれば使ってもらえる。そのアピールの仕方やと思いますね。全てが全て本丸御殿のような、四方無地の、伊勢神宮も含め、あんな木を求めても無理やし、ただああいう建物は未来永劫続いていくものだと思いますよ。お客さんが無くならないものだから、それはそれでいいのかなと思いますけどね。ただ 200 年待たないといけませんけど。そうやって次の世代のことを考えてやっていけば 200 年後はやってくるってことですよね。

[C] やっぱり加子母もこのままずっといけるかっていうと、今だいぶね、昔だと家業があったりだとか、近くに仕事があったりだとか、おじいちゃんお父さん子供っていう 3 世代が加子母にいるっていう家が多かったんですけど、だんだんそれが今若い子たちは出ちゃったまんまっていうのがだんだん増えてきているので、その辺がまた、その辺を解消していくためにも地元の仕事を作っていくっていうか、作っていかないとそういった精神的なところも

守っていけないなって

[B] やっぱり名古屋を中心とする東海とちょうどいい距離なので、それは本当に本格的に考えていけないといけないって思いますね。それでそういう人たちの力を借りて、自分たちも我が振り直せじゃないけど、その人たちの山に対する考え方の影響を受けつつ、自分たちも営々と山を守っていくっていう施業をしていかなきゃいけないって、義務があるのでどうしようもないって、自分の身を守るためにはどうしてもそれをやっていかなきゃいけないからね。そういう人たちの力を借りるというか

・山守内木家

[B] 僕たちも一応彼の話聞いていますよ、聞いてきてはいますけど、実感としてそうせざるをえんのかなと気づき始めているってことですよ。最初からすごい共感してとかではなく、そうなんやって。もちろん彼の先生が災害に強いってのは聞いてはきて、なるほどなと思ってはいたけど。

[C] 実際にね、江戸時代から66年周期の手法でしたっけそういう実技っていうか、尾張藩が定めた森づくりの体験っていうのがあったわけだね。

みんなそうやっていろいろ言っている人がいるのでね、哲朗さんみたいな人が言ってくれるとね。

地が加子母じゃないって、元々加子母のなんですけど、加子母で生まれ育った人が言っているより、逆に外から来た人が発するのでは全然意味が違うので

うちらが一生懸命教えてもらって、うちらが発信しても全然意味合いが違いますからね

・木曾ヒノキへの憧れ

[B] 熊沢和之さんたちも、東濃ヒノキ東濃ヒノキって言いつつ、ポロッと、俺らは木曾ヒノキを育てたいんだみたいなことは言うんですよ。東濃ヒノキって、小さい国有林の木曾ヒノキだって言う感覚、それがここら辺にはいっぱいあったってことで、あんなに大きくなだけで。俺らが育てているのは木曾ヒノキなんだと、なんか自負があるから、そういうのを時々感じることもあるんですよ、あの人らの言い分を聞いていると。

あれに対する憧れとかね、それが我が領土にあって、しかもそれに携わった内木家もあって、それがすごい誇りなんでしょうね、やっぱり。それが山に近かった付知には内木家がなくて、何故か加子母にはあって、で王滝の方にもなくてね、三浦山の方にはなくて。

東濃ヒノキって言っているとやっぱり、普通の民家作る時のブランド品ですよって、一般の建築材っていう捉え方になってしまう。

それがうちにあるんやよって、誇りですね。だけじゃないですけど、社会科で習う日本の三大美林の一つが、一角がここにあるんだっていうね。

・災害への不安

[B] 古い木が、国有林のような、直根が伸びていくって風が、あっちのように厳しくないじゃないですか、こっちの方は、上の方はゴロゴロしていますけど、この辺りの、里の辺りは結構土があって、そこでそういう直根が伸びてしっかり立つって、いう事はあるのかなって、いうのが自分たちの代ではわからないので。

向こうの大杉の近くの乳子の池ってところの木が台風で、風で倒れちゃいましたけど見事にペターンと倒れていますもんね、こんな太い木が、樹種はスギでしたかね。本当に根が広がってはいますけど、深くってないんで簡単に倒れちゃって。これ、全体がこういう風だったら大変だなと思って。で、それこそ台風の勢力が衰えずに日本に来るようになってるので、これからバタバタ行くんじゃないかとね。

まだ、先端がね折れて吹っ飛んでいるとかだったらあれですけど、倒れているのを結構山で見るので、本当に失敗だったのかなって。

・森林組合

[B] 森林組合っていう一つの事業体が法人として食っていくための伐採、経営するために伐採していることに、あのやり方はっていう人たちがいるのは分かっていますが、でもまあそれも、数少ない就職先の一つ

それこそ加子母村役場があるところからすると、1/4とか1/5になっちゃってる訳ですよ、職員の数かね。sonだだけでも人口が減る訳ですからすごく就職、特に山に関する就職先っていうのは大きいので、そこら辺はみんな認めつつも、ある程度、そのやり方のこだわりはあるのかなって。でも目指しているのはみんな一緒なのかなって。

・林産物

[B] 最近コシアブラ、コンテツ（山菜）がね、結構、都会の人が好むようになってきて。ああいうのって、ちょっと行く気になればバツと、食卓には並ぶんですけど、僕は実際に自分で採りに行くことはなくて、おじいちゃんが行って採ってきてくれたやつを食べるんですけど、それだけでも商売ってうか、山の産物で利益をあげるっていう、大儲けはできないんだけど、そういう風に生きていければなって思いますね。

記号	名前	聞き取り日時	2020年9月7日
D	内木篤志	聞き取り場所	加子母森林組合
	所属・役職	加子母森林組合前組合長	

・千坪割について

それじゃみんなに細かく割って植林させようっていうことで、各地区に割り振って測量させて、その時に買った山は家産として育てると、困ったら売ってしまう、余裕が出てきたら買い戻せっていうメッセージをつけて、だからみんなそれ、炭を焼きながら植えた人もいるし、茅場と言って牛馬の餌を刈りながら外に植えた人もいるし。

当時はだいたい伐られたけど、ただ、太いのは伐られたけど、細いものは残ったでしょうね。だから今回名古屋城にいったのも120年前後の木とかまだ結構あるので、そういうのは当時まだ細くて、それほどのお金にならないから残した木が今成ってきているんだと

・名古屋城への材の提供について

今回は、天守閣の方へ全部で56本出したかな。それが今回ギリギリの寸法で出したので、もっと太いのがあっても胸高直径で80cm前後のものを56本

今回は1本100万円くらいですからね。100年経って、1年1万円の価値がつくことは素晴らしいことで。

木を伐らなくて言った人もいるんだけど、参加してくれた人は、多い人は1000万

途中で伐らないで残していた木が点々とあったからってことなんですね

5階の柱については55本いるわけですけど、最上階で一番いい柱を使いたい、節のない材という注文だったので、太い木を30~31cm角に最終的位にすると中から節が出てくる可能性があるわけ、表面で見た感じと中では分からないので、表面を見てこれは多分節が出ないなという木を選ぶわけですよ。それで31cm角がギリギリ取れる直径の木を選ぶもんで実際に使われるのは5m40とかですけど、6mの長さに伐ったんやね。だから竹中が木が若いとか、白っぽいところが多いとか、だからだめだというのはされてたんで。それで結局江戸時代はどうだったのかっていうと、大きな9cmの節が写真に残ってるらしいんですね。けど色々難しい条件を竹中さんがつけてきたので今回は120年くらいのものでとにかく四面無節になるような木を選んだというわけです。

選んだのは買ってくれる業者がね。森林組合でそれをやるとリスクが大きいので、買ってくれる業者がこれなら間違い無いっていうことで値段をつけてくれる。伐った時にすでに中に腐りがあったりとかはまた別の話で。製材した時に節が出ないっていうのを目利きの人がちゃんと。

加子母の木を選んだのは、社寺、仏閣の材料もやってる製材所で「ウッディ四万十」っていう会社でしたけどその人が見ながら、これは1面しか無節が取れんな、で4面取れそうなのやつは全部木に番号をつけて、向こうが何番と何番とって指示が来る、でうちの方は要するに計算仕様を作って、立米と曲がりがあるかないか、そして直径とかそういうのを打ち込めばなるように作って、そうすると大体1年1万円になったんで、森林所有者にこれくらいというと、それでいいと。でその合計金額を四万十と契約させてもらって、四万十さんは竹中さんと加工賃とか色々ね増えたものをもらう。

・森林組合の施業について

今まさに加子母の山奥では4世代が育つ山づくりをしようということで、始めたのは平成6年からなんでまだ20数年しか経っていないんだけど、とにかく100年以上で70年生、40年生、10年生っていうようにとにかく30年ずつ年代が違うような、1つの山の中で、そうしておけばどの世代でも山から恩恵を受けることができるし、400年後か、いつになるかわからんけどそういった社寺、仏閣に使えるような太いのを伐って出せると。

今は、自分で管理できる人が少なくなってきましたよね。そうでなくてそれを、地域の森林を守っていくのは森林組合でなきゃだめだということで、森林組合の方針としてちゃんと特別仕様書っていうのを作って、何年生になったらどうする、将来的にどういう山にしていっていかっていうのをつけて、個人と森林組合との契約を結んでやっと思ったんですよ。で、国はこれから加子母はこの地域の山をちゃんと管理してください。中にはどうしてもお金が欲しいという人がいたら、最後の軽トラを買いたいとかね、70過ぎの人で、一生懸命育ててきた山だから、息子も名古屋に行ってなかなか帰ってこなし、じゃあお金になる太いのだけ伐って手取りで70万くらいあるようにしようかっていうことで、全部伐ってしまっただけじゃなくて、今必要なお金だけ取ればいいよっていう話をしながらやって。それができるのはやっぱり林道がね、山の中の道があるから1本でも10本でも必要な分だけ持ってこれるわけやね。道がなかったらどうしてもケーブルを張ってやらないといけないってなると、ケーブルを張ったり撤収するだけでも50人とか60人の人件費がかかっちゃうわけやね。そうすると、ほとんどの木を伐って出さないと全然残らないということになっちゃうので。それが歴代の加子母の村長さんたちが農業の基盤整備は田んぼの舗道整備だと、山の基盤整備は道作りって言って林道、木の値段が良かった時代のね、40年代50年代に道作りにお金を出してくれたおかげで。

九州の諸塚には負けるけどね。九州の諸塚は林道密度200mくらいあって。私たちも林道の作業道の入るところは全部密度入れて、必要な時に必要な分だけ木を出せる体制作りっていうことで取り組んできた。

・加子母の文化

特に昔は家産として、家の大事な木として育ててこの1本だけは伐らずに残して、将来、孫の代になったらという思いで残してくれてね。そういうのが結構あちこちに残っているの。日本中でも「たてぎ」とか名前は変わっているんだけど、母樹、種を落とす、そういう木はあちこちに残している地域はありますけど。加子母は明治、大正で払下げした時の家産としてちゃんと育てていく、家の宝として。そういうのがちゃんと繋がってきて今残っている。だから伐ってしまう人は全部伐ってしまっただけ全部植えた人もいますけど。

・「美林萬世之不滅」について

構想は平成6年、掲げたのは平成13年

木の値段がね、木材市場行くとね、ヒノキが65%、あとスギとか他の木が残り。だけど安い木もいいヒノキも含めた市場の平均価格っていうのが、目標は売り上げが3億、1年間に5000㎡集めてっていうのが50年代とか60年代後半、まあ、平成2年までやね、そこで3回達成できたわけですよ。つまり1㎡が6万円の平均価格やね。だからヒノキのいいものは7~8万円、スギもまあまあ値段が良かった。ところが平成5年を境に全然、だんだん下がる。で平成6年ごろにお金が欲しいっていうことで山に行ったら結構な木が、当時80年生くら

いやったかな、これを道も近いし全部伐らないで残そうよということで残したんです。ところがね、平成9年くらいに台風でいっぺんに倒れちゃってそこから200本/haくらい林野庁の人が加子母で試験的にやってみないかって話をもらって岐阜県の方に予算が150万円きて。岐阜県、林野庁から指示があったからすぐに話が来てちょっとやっちゃえていう。

平成15年から正式に始まったんですけど

もともと、こんなのやりたいと言っていたんで、で、その試験的なのを平成13年から取り組む時に、まさに私たちのやりたいことを、林野庁も思ってるならこの方法でいこうってことで、そこでどうせやるなら何かいいあれを考えようということいろいろ考えて

これ、今は「不滅」にしていますけど、「不易」っていう言葉も出てきてちょっと迷ったんで高校の先生にどっちがいいって聞いたら、それは「不滅」の方がいいって言うから、インパクトもあるやろうって言う話で、じゃあこれで「絶やさず」っていう風に読むようにして。それまでは3世代で完結だったんです。おじいさんが植えて、親父が育てて、孫が伐る。ところが木の値段が安くなってくると、とても60年くらいでは伐れない。やっぱり90年は必要ってなってくると、4世代じゃないとそれができないですし、1軒の家でもだいたい30年ずつくらいで世代が交代していこう、山も本当に結果が分かるのは30年後でないと結果は分からないから山も世代も30年単位で考えていったら、どの世代も山から伐って収益を上げることができるし、それでみんな山に関心を持って手入れをしてくれるだろうっていう。そういうことを考えながら「美林萬世」でいこうと。

森林組合の公報で特別号っていうのを何回かに分けてその思いを全部綴って公報を出しましたし、いろんなところでその山づくりの話をさせてもらった。実際に木を伐りたい時には、担当者が皆伐はやめましょうっていうことで、色々説明はしとる。ただ、1回だけ丸裸の山が見えて残念でしたけど、それは組合とは関係なくて業者に任せてしまっていて。

最近、森林組合とやりとりしないで勝手に管理する人はいないと思いますけど、下呂の市場に直接ね、山を丸ごと売ったって話になって、被害も、後、隣の山でね、台風の被害が出たりして。最近はどうもそういう人も、逆に赤字になってしまいうんで、多分ない。

・ 施業の方針

もちろん、山の高い所傾斜が急なところは、道が入らないようなところは逆に経済林じゃなくて環境林にしようっていう方針で

(温帯性針葉樹林の)ゾーニングのやつね。あれも、そこらへんを踏まえながらゾーニングは組合の方でやっている。

今、補助金の制度も色々変わってきてるんであれですけど、とにかく里に近い所で道の入っているところは周辺はもちろん経済林ですし、遠いところはおじいさんたちが一生懸命植えてくれたところがあるんだけど、もうやめて実のなる木をどんどん残していく。逆に間伐はするんだけど、いい木を残すっていうんじゃなくて太い木を残す、スギでもヒノキでも。そして明るくしてクリの木とかどんだりとか色んなそういったのをちゃんと育てていこうと。だけどね、標高が高いと背丈がどうしても伸びないんですね。だからこう円錐形の木になりやすいから、高い所では将来、文化財に使えるような木は無理だと思うんで。それはやっぱり密植して1本伐ったら3本植える。そして昔は1m80間隔で植えたのを90cm間隔で植えてそしてそこで競争させていく。実際にそういった山もやっとなるんで。1回なぜこういう山が、やっぱり密植させないと丸くてまっすぐで年輪の詰まった木はなかなかできないので。

目標の本数を決めている、100年以上は5本/ha、70~100年生以上は45本/ha、40~70年生は200本/ha、そういうのを目標にしながら、それで小さい時は間伐で対応して、70年

生を伐った時と 100 年生になったのを伐った時に前の計算では 300 万円 /ha、それで順番順番にそれを繰り返していく。そうすることによって大きな木、中くらいの木、小さな木、で大きな木を伐ったら空間ができるのでそこに次の世代の木を「巣植え」と言いますが、固めて植える。そうするとカモシカに食べられても 5 本の内の 1 本は残るだろうと、でそれを育てていくという

壮大な目標ね。1 年 1 万円の価値になる木を育てていく。

記号	名前	聞き取り日時	2020年9月24日
E	桂川利也	聞き取り場所	中津川市市役所
	所属・役職	中津川市農林部次長	

・裏木曾古事の森について

すごく直結するっていう風には、当時も今も、思っていないんです。根底にあるのはやっぱり森林面積80%とか言ってますよね。どこでもそうなんですけど、木材を使うっていうか循環して行かにゃいかん。加子母の木っていうのは良質な木材なんですよってことを広く知ってもらうために古事の森をやっているということなんです。

全国の古事の森っていうのは地域の特色にある、檜皮葺を大切に守っていくところ

北海道のなんとかを守っていくところ、中津川のところは樹齢200年から400年の木曾ヒノキを守っていくところっていうことで、裏木曾古事の森っていうのがスタートして行ったっていうところ

エリアとしては国有林、民間の人たちがその木を伐るだの育てるだの言えないエリアだったので、国有林を巻き込んで、当時の東濃森林管理所、地域の人たちの集まり、行政が入って、裏木曾古事の森育成協議会っていうのを作って始めてる、保護をしていきたいと思います。400年育ててっていうことで

平成16年から地域の人たちが下草刈りをやったり、学校の子供たちが森林学習の場として活動が続けてきていますが、今、木が大きくなってきたので、もう、とりあえず今はする事がないのかなと3mくらいになってきているのもう少し経ったら枝打ちとかそういう作業になってくるんですけど、草に負けちゃうので下草刈りをするという段階は終わったという。今は積極的な活動がない。森を守る活動から、ガイドツアーの方に発展して行って、地域の住民も知らないのをお知らせして、下流の地域の人たちにも来てもらってっていう。平成16年の頃と比べると森林整備という部分で言うとやる事がなくなったっていう。

また、平成30年に伊勢神宮の式年遷宮の斧入れ式を古事の森の中でやりました。

・裏木曾古事の森育成協議会の前身

実はこれ、裏木曾古事の森育成協議会っていうのは、できる前身があってですね、付知峡自然保護管理協議会っていう加子母村と付知町の木材関係者が集まって、観光であるとか森林資源を売っていくための協議会があったんです。付知峡自然休養林保護管理協会っていうような名前だったと思いますけど、村長さん、町長さんが入って、各種団体が入って、二つの町と村の木材関連産業の方が集まって協議会を作っていた。

これがですね、市町村合併が平成17年にあったんですけども、ちょっと活動もできなくなってきたねっていう事で、解散するかって言ったらところで古事の森協議会ができて、古事の森協議会に職員通帳から一式全部、渡そうよって事で総会で決めていただいて、資金も受け継ぐ形で、裏木曾古事の森育成協議会っていう名前でスタートしていったと。なんで裏木曾古事の森育成協議会のメンバーっていうのは、加子母村、付知町の建築屋さん、それから製材所、工場、観光業っていう、元々付知峡自然休養林に入っていたメンバーで、新たに仕切り直して盛り上げていこうよっていう事で続いていると

・現在の取り組み

今積極的に取り組んでいるのが、ウォーキングガイドツアーってことで、多くの人にこうい

うところを知っていただきましょうよってことで、森林の手入れとかそういうこともあまりやる事がなくなってきているので

・ガイドの育成について

育成協議会でやりましたし、この中に地元の東濃森林管理所さんにも入ってもらって、昔は東濃森林管理所の職員しか案内できずに、色々なノウハウ、マニュアルを持っていたんですけど、それをここに渡してここでガイドを養成するって事で、プロのガイドの方を招いて、講師を招いて、10人くらいの、今、ボランティアガイドがいます。

・始まりのきっかけ

一番最初のアクションは安江鐵臣さんが熱い思いを語りに行ったと思うんです。で、立松さんの方も理解を示して、じゃあ、色々なところと被っていないなという事で200年400年の樹齢、大径木を育てて森を作りましょうよって事で設定されたんですけど。そのためにはやっぱり、木曾ヒノキの樹齢300年400年の木がどういうところに使われてったのかっていう話をされたと思うんです。やっぱりそういう物的証拠があるならば、ここでしょっていう事で

一番チャンスやったのは、東濃森林管理所の所長さんが笹岡所長やったからできたっていう、森林管理所の所長さんって1年とかで変わって行かれるんですよ。私たち地域の人には当たり外れがあって、積極的に地域に溶け込んで、地域の役に立とうって見える所長さんと、1年過ごせたら良いわって方と。この方なんかはとても積極的に関わられてたので、この古事の森も関わられてたし、在任中にやられてたし、伊勢神宮の御用材の伐採式もこの方が所長のときにやられたって事で、中部森林管理所もこの方ならこういう行事が平成何年にはあるけど、任せといて良いやろって送り込んでと思いますね。

地域の取り組みに積極的に参加されていたんですよ、だから色々話す機会が多かったと思うんです。そういう中で、鐵臣さんたちがこういうこと、古事の森みたいなことをやって行きたいんだって話があって、じゃあ立松さんと繋ぎましょうよってことで意気投合したという感じだと思います。

・優良材生産クラブについて

森林組合が立ち上がるきっかけになったのが優良材生産クラブなんですよ。加子母の優良材生産クラブのメンバーの方たちが、林研クラブが加子母優良材生産クラブっていう言い方、加子母はしているんですけども、自分たちで優良材育てるための勉強会の組織が、林研クラブ、加子母では、加子母優良材生産クラブなんですけど、昭和の初めごろに彼らが自分たちの木を持ち寄って木材市を開いたっていうのが、加子母の森林組合の木材市のきっかけ、走りになった訳で。森林組合の前身になった組織だと思います。加子母森林組合の前組合長の内木篤志さんがよく挨拶で言っていたのが、林研クラブの人たちが集まって土場を作って木材市場をやり始めた、それが森林組合の木材市の始まりやと。森林組合っていう組織自体は森林組合法の中でできてる組織なんで公的な組織としてだんだんと拡大していきまして、いつしか優良材生産クラブを追い越していった優良材生産クラブに対して補助金を出すような形で逆転していったって形でね、そういう部分がありますね。

森林組合っていうのは大量生産をしないとやっていけない、で、優良材生産クラブの方っていうのは、個人経営で良質材を育てるっていうその違いやと思います。決してアンチっていうことではないですし、優良材生産クラブの方も森林組合も木材市に材木を出していますし。

・名古屋城天守閣への材の提供について

森林組合がコーディネーターとして、こういう木はありませんかって、声をかけて何十軒かある林家さんが、うちにあるよ、割と出しやすいところにあるよってことで手をあげて、56本伐って。

木材生産ってまだまだこの辺りは間伐って言うんですけど、皆伐してまた新たに植えましようっていう国の施策があって、そのやり方はここら辺は賛否両論あって、東濃ヒノキの産地で四方無地の柱で食っていきましようって土地なので、節があってもなんでも良い、住宅建てた時には家の中に隠れちゃうから高温乾燥でも良いっていう人たちの木は皆伐したような山でいいんですけど、柱を見せたいんやっていうところや、神社仏閣であったりってところの柱は、高温乾燥じゃなくって天然乾燥でピンク色でヒノキの香りがしてっていう、お客さんは求めている。

こういう風に林家として成り立っているのは、加子母では数人だけ。

・文化財のためん森づくりの難しさ

一世代でできる訳じゃないので、三世代四世代前からやってきてることなので、で加子母は家が1000軒くらいあるんですけど、そのうちの900軒くらいは森林組合員なんです。ってことは900軒が山を持っているってことなんです。だけど、自分のところの山がどこにあるかわからない、何が植わっているかわからない境目わからんって人が増えてきて、まあ90%そういう人なのでそういう人たちは、現代の施業方法で、皆伐して植えるか植えないかわからないっていうそういう状態になっていると思います。

やっぱり木はどんどんどんどん成長していきますので、抜き切りをしないといかないと光が届かない山になってしまっちは、災害の原因になってしまうので。でもそういう仕組みなんですよっていうのは小学校で光合成の勉強はしたけど、今山がそういう状態になっているんですよ、光が入らないんですよっていうのは山主の、さっきの90%の人たちは考えてないんですよ。今手をつけても金にならんから放っておけばいいっていう考え方になっちゃうので、そこは森林組合がうまく今だったらこういう補助金もあるので間伐やりませんか、今こういう注文が来てて、あなたのところの山にはこういう木が立っているのでもやしませんかっていうのを言うていくのが森林組合の仕事なので、加子母の森林組合はそういう事が上手に行われている。そんだけ市民に近くやりくりしてくれるのは加子母の森林組合だけなので

・森林組合の施業について

どっちかっていうと選択肢の中の、加子母森林組合の場合は「美林萬世之不滅」って言うて大量生産の皆伐する方式はやめましよう、必要な時に必要なだけ伐って高く買ってもらいましようっていうコンセプトで組合員に働きかけているので、市内に三つある森林組合の中ではちょっと大量生産大量なんとかっていうやり方を望んでいないので、組合員としていいと思うんです。

・文化財のための森づくりについて

そういう花火的なもの（イベント）を、古事の森であったり、平成17年には伊勢神宮の第25回の御神木の伐採があった、平成30年でしたっけね、次回の遷宮の斧入れ式があった、去年は名古屋城の御木曳があったっていうようなことでね。そういうことを今、数年に一回

やっているんですよ。それがなくなってしまうと、本当に良質材が育つ土地なのに良質材を育てないまま、森林が荒れていってしまうような形になってしまうと思います。で、なかなかそういう花火をどうやったらみんなが注目してくれるか難しいんだけど、今度は令和7年に今度の式年遷宮の伐採式があるのでその前後にですね、機運を高める機会ができるかなって思ってるんですけど、平成27年にですね、姫路城が平成の大改修があって、その時に広めたのが西の心柱が、木曾ヒノキ備林から出てますよってことを言えて、これだけ価値がある山が中津川市にあるんですよ、そこと同じところで育ってる皆さんヒノキですよ、もうちょっと誇りを持って山の手入れをやりましょうよっていう感じでやったんですけど、今もう世代が代っちゃって人間の生活のスタイル、スピード感が変わって、いつまでも昔のスタイルの話をしているばかりではいけないし、そこが難しいっていうか歯痒いっていうか

・本気で文化財のための森づくりに取り組めない

やっぱり古事の森だけじゃないですけど、いろいろな業態があるんですけど、結局が個人個人の商売人の集まりになっていて、個人個人の商売は頑張るけど、団体として地域を守りながらやっていきましょうっていうところまでは、腰掛けみたいな形でしか参加してこないんですよ。昭和50年60年の頃のメンバーはよし、やろまいかって言ってできたんですけど、今のご時世ではその団結、市町村合併をしちゃって、例えば中津川市は商工業の町だと言われてるんです。合併して北部とくっついて森林面積も増えたんだから、林業の町中津川っていう名前で広報誌に3、4ヶ月シリーズで載せたんですよ。そうしたらすぐにクレームの電話がかかってきちゃって、市民からいつから林業の町になったんだって中津川市は商工業の町だって、今でも外貨を稼ぐ、金を稼ぐって意味からすれば、自動車部品作って、電気製品作って、栗きんとん作ってって方が、金を稼ぐんですけど、そういう人たちとの合併の中で昭和50年60年に頑張ってきた人たちの気持ちが、モチベーションがなくなってしまうって、今の家を欲しがってる人たちっていうのは、ローコストの家でいいよって話になっちゃう。もう一つは山を活性化していくにはどうしても立てとけばいいわってわけにはいなくて、伐って消費していかないかんのですけど、消費の方法がですね、1㎡1万円みたいな単価が設定がされちゃって、合板工場や、チップであったりバイオマスであったり、そういうところの単価が標準単価になってきちゃっているんで、加子母の四方無地のヒノキを出しても、1万5千とか1万8千みたいな単価になっちゃってるんです。で、合板工場に行く木材とどこが違うっていうと、そんなに違わないんです。合板工場に行く木材はB材C材って言うてるんですけど、合板工場もそんな曲がった木を持ってこられても困るんで、直もので、4mものでって言うてるもので、こんな四寸角が十分に取れるような、木がバンバン入っているわけなんですけど、単価設定に誘導されちゃったので、それを取り戻すのは難しいと思います。名古屋城で使われた木が中津川市産のヒノキで使ってもらえたって事がね、本当に建った時には、岐阜県の中津川市産のヒノキっていうのが売りで、じゃあ一緒のところのヒノキっていう事で家を建てようって思ってくれるとラッキーって感じなんですけど。結局森林環境譲与税が始まって、全国で一律で言われているのが手付かずの民有林の森林を整備しなさいと、林家さんが自分のところの山がどこか分からなくなっちゃってる人ばかりになっているので、そういう人を捕まえてやらせなさいって。中津川市は8割を森林整備、2割を普及啓発と人材育成に使おうってなってますけど、その辺の考え方で進めようってなると、いつまでも良質な四方無地を育てようでは、息詰まってしまうところがあったり、良質材の産地じゃなかったら、皆伐して再造林して皆伐して再造林してっていう事でやればいいんですけど、中津川の北部の場合はそれはちょっとできないなっていう。

・多様な植生の森について

できんことはないですし、岐阜県がゾーニングして進めているのが、経済林なのか自然林なのか、まあ奥山に手をかけても育たんし、もったいないから自然にした方がいいでしょって災害防止の観点からも針広混交林がいいって言われますのは、もう一つ燃料の形態が木材から化石燃料に替わっていった、生活に必要なくなったから、ヒノキに植え替えられていったんですよね、その逆の生活に戻していくっていうのは無理なんですけど、広葉樹も需要があったら、谷の周りの崩れるようなところは順次植えていこうよってなると思うんだけど。

・文化財の森づくり推進の難しさ

僕は元々加子母村役場の人間なんでだいぶ北部の考え方に染まっているんですけど、ここに座っていると、あまりそればかり言えん訳なんですよね。やっぱり森林環境譲与税が始まってくれば、山に興味ない人を捕まえて更新していきましょうよって、もう伐れる年齢になっているから、全部伐っちゃって新しいの植えましょうよってやっていかないかん訳なんですけど、北部はいろんな、針広混交林であったり、大径木の話であったり、複層林の話であったり、あそこの文化として、まだまだそういう考え方のおじいちゃんたちが生きているので、それは通用するっていうか、まだ守ってくれるのかなって。一周遅れでプランが回ればいいやないかって、その一周遅れにまだまだなれないんですよね。みんながまったく国産材で家作りましょうよとか、良質なヒノキでとかって話になれば、加子母は勝ちだと思うんですけど。今度11月14、15日に愛知スマイルフェアっていうのがあって、オアシスでそれも内木哲朗さんがパネラーで参加されて喋るんですけど、ちょっとメンバーがね、名古屋市長さんと、内木哲朗さんと、細川さんと、中津川市長となんですけど、うちの市長も心配しているんです、あっち派やと思われても敵わんなと。とは言え裏木曾の森林文化っていうのがテーマなのでそれは行かないかんっていう事で